KH426-H59
1200700349269
複写

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

漱石全集

第十二巻

書簡集

集中最初の書簡

KH426-H59

國立國會圖書館藏書

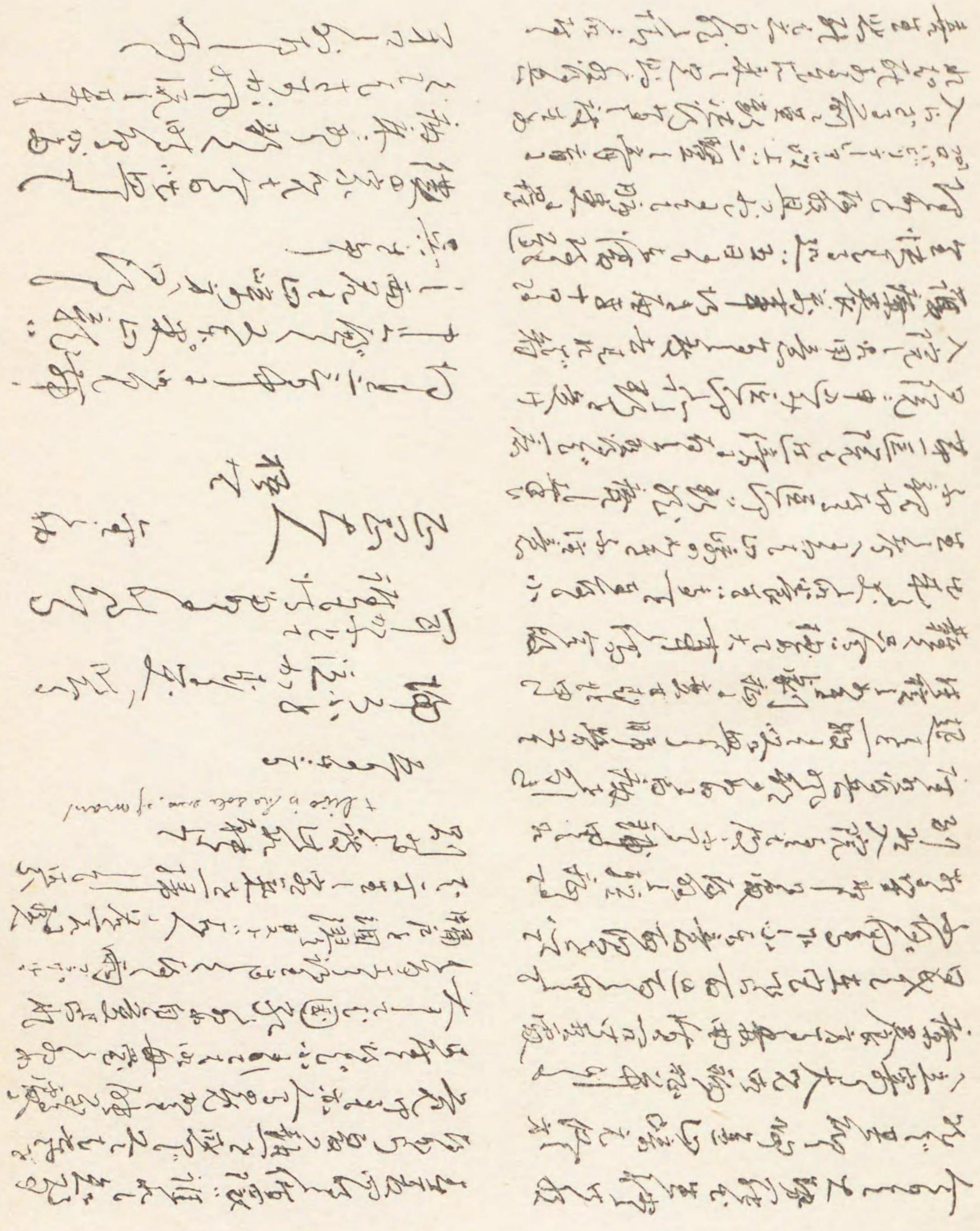
I種
W

1200700349269

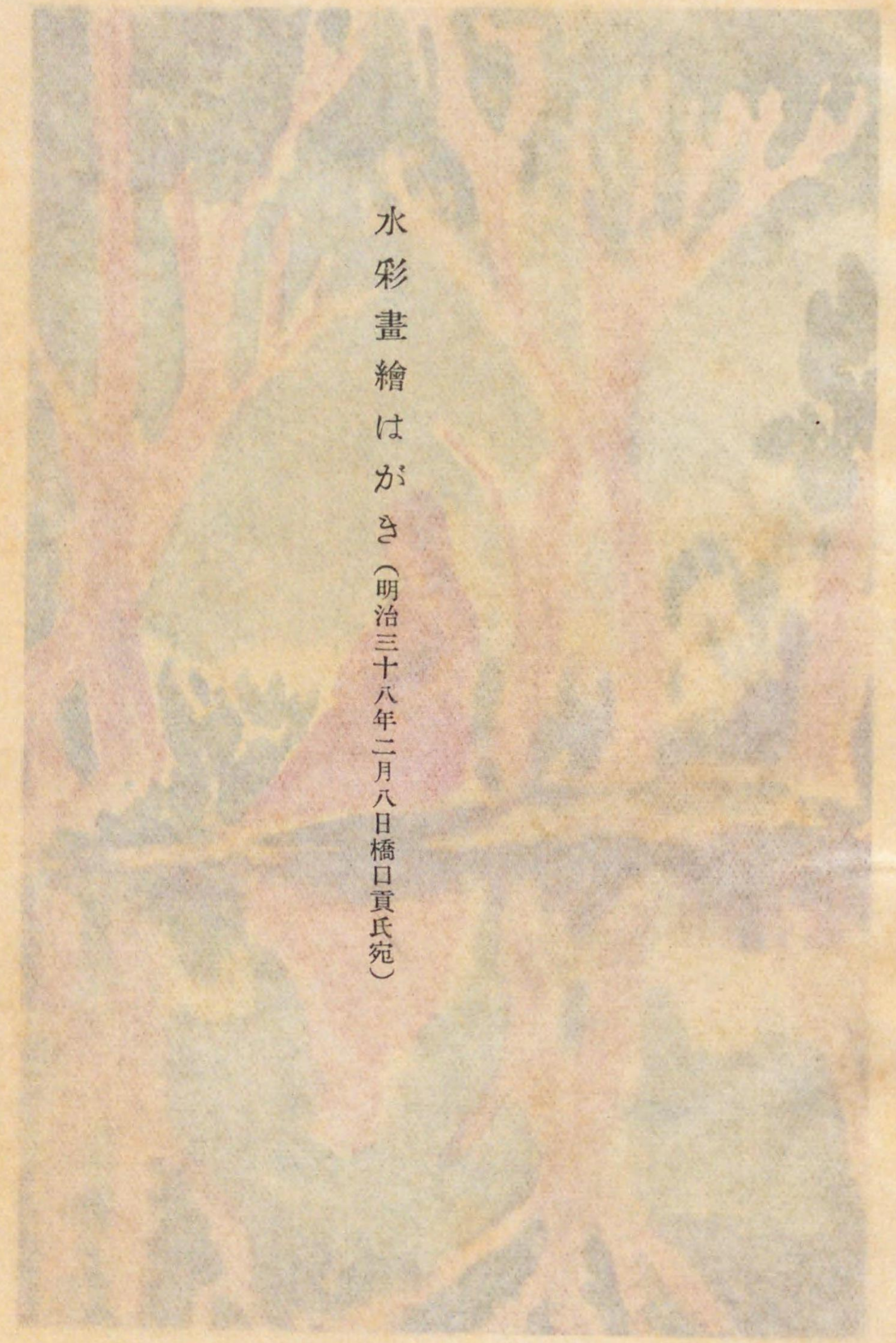
集中最初の書簡

KH426-H59

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200700349269



集中最初の書簡



水彩畫繪はがき（明治三十八年二月八日橋口貢氏宛）

水彩畫繪はがき（明治三十八年二月八日橋口貢氏宛）

水彩畫繪はがき（明治三十八年二月八日橋口貢氏宛）

目次

明治二十二年　一
明治二十三年　一三
明治二十四年　二七
明治二十五年　五三
明治二十六年　六一
明治二十七年　六三
明治二十八年　七三

明治二十九年 八九
明治三十年 一〇三
明治三十一年 一二三
明治三十二年 一二九
明治三十三年 一三五
明治三十四年 一五五
明治三十五年 一九七
明治三十六年 二一九
明治三十七年 二四三

明治三十八年 二八七
明治三十九年 三八五
明治四十年 五九三
明治四十一年 七四九
明治四十二年 八二七
明治四十三年 九〇五

明治二十二年

五月十三日　手便　牛込區喜久井町一番地より
本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ（一）

今日は大勢罷出失禮仕候然ば其砌り歸途山崎元修方へ立寄り大兄御病症幷びに療養方等委曲質問仕候處同氏は在宅乍ら取込有之由にて不得面會乍不本意取次を以て相尋ね申候處存外の輕症にて別段入院等にも及ふ間鋪由に御座候得共風邪の爲めに百病を引き起すと一般にて咯血より肺勞又は結核の如き劇症に變ぜずとも申し難く只今は極めて大事の場合故出來る丈の御養生は專一と奉存候小生の考へにては山崎の如き不注意不親切なる醫師は斷然癈（原）し幸ひ第一醫院も近傍に有之候得ば一應同院に申込み醫師の診斷を受け入院の御用意有之度去すれば看護療養萬事行き屆き十日にて全快する處は五日にて本復致す道理かと存候且ツ少シにても肺患に罹ル「プロバビリチー」アル以上ハ二豎の膏肓に入らざる前に英斷決行有之度生あれば死あるは古來の定則に候得共喜生

悲死も亦自然の情に御座候春夏四時の循環は誰れも知る事なから夏は熱を感じ冬は寒を覺ゆるも亦人間の免かるゝ能はざる處に御座候得ば小にしては御母堂の爲め大にしては國家の爲め自愛せられん事こそ望ましく存候雨フラザルニ牖戸を綢繆スト ハ古人ノ名言に候へば平生の客氣を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!

五月十三日

歸ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

金之助

正岡大人

梧右

何れ二三日中に御見舞申上べく又本日米山龍口の兩名も山崎方へ同行し吳れたり僕の家兄も今日吐血して病床にあり斯く時鳥が多くてはさすが風流の某も閉口の外なし呵

呵

二

五月二十七日 ル便　牛込區喜久井町一番地より
本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ　(二)

昨日は存外の長座定めて御蒼蠅の事と恐入り奉る其砌り妄評を加へ御返呈申上候七草集定めて迂生歸宅後御讀了の事と存じ候右に付き後にて胸に手をあて善く〳〵勘考仕れば前後の分別もなく無茶苦茶に六ヅカ敷漢字を行列したるは流石の某も例のヅー〳〵しきに似ず少しく赤面の體に御座候何事も不作法者と御堪忍遊ばせと御詫の序でに願上げまするは批評の後に付したる二十八字の九絕に御座候是は餘り大人氣なく小兒の手習と一般にて只々紅燈綠酒の文字を書き散らしたる而已に候得ば斯ル者を見事の尊著にくッつけ置かん事七草集の恥辱且つは人目を愧づる小生の心底憐れと覺し給ひ一遍の御回向ならで一刀兩斷に切り棄てゝ屑籠の淨土に逐らせ玉へ生レつきの不具者に候得ば扁鵲の妙術も一人前には治し難きは無論の儀と存じ候得ば生きて人目に曝しますより殺した方が親の慈悲かと存候去り乍ら凡夫の淺ましさ萬一貴君の配劑にて生來の癈疾も頓治の見込なきやと夫ばかり心配仕居候燒野「の」きゞす夜の鶴不具な子程「可」愛ゆきは矢張り親の慾目に御座候必ず必ず凡夫と御さげしみなき樣願上候　匆々

二十七日

菊井の里

漱石より

丈鬼様

七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデゲスと少しく通がりて當座の間に合せに漱石となんしたり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし様に覺へ侯此段御含みの上御正し被下度先は其爲め口上左様

米山大愚先生傍より自己の名さへ書けぬに人の原文を許するとは「テモ恐シイ頓馬ダナー」チヨン々々々々

三

八月三日 牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（三）

炎暑之候御病體如何被爲渡侯哉日夕案じ暮し居侯とは些と古めかしくかたくるしき文句ながら近頃の熱さでは無病息災のやからですら胃弱か腦病、脚氣、腹下シ抔種々な二豎先生の來臨を辱ふする折柄なれば貴殿の如き殘柳衰蒲も宜しくといふ優にやさしき殿御は必ず療養專一攝生大事と勉强して女の子の泣かぬ様餘計な御世話ながら願上侯偖惡口は休題として愈本文に取り掛りますれば小生義愚兄と共に去月廿三日出發東海道興津へ轉地療養の爲メ御越し被遊昨二日夜歸京仕侯興津の景色の美なるは大兄も御承知ならんが先ヅ大體を申せば

都城之西、六十餘里、山勢隆然、拔地而起、潮流直逼山麓、山海之間得平地、纔五十歩、旗亭十數、點綴其間、與蜑戶漁家錯落相間、呼曰興津、所謂東海五十三驛之一也、山腹有古刹、佛閣經樓、高出于青靄之上、望之縹渺如畫圖、興津之西、山勢漸向北而走、海灣亦南曲、三里而達清水港、港盡而灣再東折、突出洋中二里許、古松無數、遠與天連、白帆明滅、行其間、是則興津驛之勝概也、呼其寺、曰清見寺、呼其山、曰清見山、呼其灣、曰清見潟、而西南長岬、橫斷大海者、爲三保松原、遠山如黛、白雲蓬勃者、爲伊豆大嶋、天晴氣朗之時、仰看芙蓉于東北、大凡騷人墨客、上旗亭坐樓頭者、杯酒談笑之際、一矚而得悉收此數者於眸中焉、蓋所謂東海道、自東都至西京、長二百餘里、有驛五十有三、山則函嶺、水則天龍矢矧、都邑則靜岡名古屋、其間長亭短驛、名山大川、固不爲鮮矣、然至山海之勝、魚蝦之美、則余獨推興津爲最、是以數年以來、縉紳公卿、避暑遊于此地、陸續麕至、山蒼水明之鄉、亦將漸化絃歌熱鬧之地、可嘆也、……

餘り長イト御退屈先ヅ〳〵御里が露ハレヌ中ニ切リ上ゲベク侯右の如く風光は非常に異な處ナレモ風俗ノ卑陋ニテ物價の高値ナルニハ實ニ恐レ入リタリ小生等最初は水口屋と申す方に投宿せ

しに一週間二圓にて誠にいや〳〵雲助同樣の御待遇を蒙むれり樓上には曾我祐準先生將軍乎として鎭座まします者から拙如き貧乏書生は「パラサイト」同樣の有樣御憫笑可被下候拙曾我中將を呼んで御山の大將ト云へり（解に曰く高之謂山、樓者高故曰御山、大將者武人之）手短かに申せば樓上ノ軍師（梁上ノ君子ニアラズ）ト云フ意味之宿屋ノ主人御山の大將ヲ拜スルコ平蜘蛛ノ如ク婢僕ノ之ヲ敬スルコ鬼神ノ如シ偖々金錢程世ノ中に尊きはあらじと樓下ニテ握リ睾丸をしながら名論を發明仕り候夫より忼慨心を鼓舞し身延屋といふに一週間三圓の御散財にて御轉居仰せ被出二三日逗留すると又々何處かの縉紳先生の爲に追出され、どうにもこうにも駿河の國立ッたり寐たり又興津、淸見の浦は淸むとても心はすまぬ濱千鳥啼くより外はなかりしが（ヤ、デン）といふ體裁、汗臭き富士講連と同車にて漸々歸京仕候何れ道中の御話は御面晤之節萬々可申述候　云々

夫先は炎熱の候時候御厭ひ可被成何れ九月には海水にて眞黑に相成りたる顏色を御覽に入べく夫迄はアデュー

菊井町のなまけ者

丈鬼兄座右

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

四

九月十五日　牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（四）

露冷殘螢瘠風寒柳影疎なるの時節とはあまり長過ぎてゴロがわるくは候得共僕が創造の冒頭ナレバだまつて御讀被下度候偖右の樣なる時節到來仕候處貴兄漸々御快方の由何よりの事と存候小生も房州より上下二總を經歷し去月卅日始めて歸京仕候其後早速一書を呈スル積りに御座候處既に御出京に間もあるまじと存日々延頸して御待申上候處御手紙の趣にては今一ヶ月も御滯在の由隨分御のんきのことと存候　云々

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

五

九月二十日　牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（五）

（略）五絕一首小生の近況に御座候御憫笑可被下候

抱劒聽龍鳴、讀書罵儒生、如今空高逸、入夢美人聲、

第一句は成童の折の事二句は十六七の時轉結は卽今の有様に御座候字句は不相變勝手次第御正し被下度候 云々

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

六

九月二十七日 ナ便 牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ (六)

貴意の如く懷冷財布瘠の候大まい二錢の御散財をも顧み給はず四國下りまで御震翰下し賜はる段御親切嘸かし感涙にむせびて郎君の大悲大慈をあり難がり奉るならんといやに恩に着せて御注進仕るは餘の儀にあらず先頃手紙を以て依賴されたる點數一條おつと承知皆迄云ひ給ふな萬事拙の方寸にありやす先づ江戸つ子の爲す所を御覽じろとひま人のありがたさ急に用事の持ち上りたるを嬉しがり早速祕術をつくして久米の仙人を生捕り先づ安心はした者の鐵砲ずれで（面ずれより脫化し來るに似たり）手の皮の厚さ一尺もあると云ふひなた臭い兵隊を相手の談判は都び男やさ男を以て高名なるやつがれには到底出來やせん引き下りやすと反り身になつて斷はると云ふ所だがそこがそれ君いや妾の爲めでげす掛がへさへあれば命の二つや三は進呈仕りてよろしくと云ふ位な親切者だからちつともひるまず古今未曾有の勇氣を鼓舞して二三回戰爭の後是も武運目出度乃公の勝利と相成令娘の身體は一部[三]一年三の組の室中を橫行しても堅行しても御勝手次第なり定めて

あらまあほんとうに賴もしい事、ひよつとこの金はんは顏に似合ない實のある人だよ」[原]と云はれるだろふと乃公の高名手柄を特筆大書して吹聽する事あら〳〵如此

九月二十七日夜

郎君より

妾
へ

七

十二月三十一日 牛込區喜久井町一番地より

此手紙到着の頃は定めて東上の途中ならむ若しも亦愚圖々々して故鄕にこびりついて居るなら此書拜見次第馳出して東京へ罷り出べき事

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（七）

歸省後は如何病軀は如何讀書は如何執筆は如何、如何にして此長き月日を短く暮しめさるゝやけふは大三十日なりとて家内中大さわきなるに引きかへ貧生のありがたさは何の用事もなく只晝は書に向ひ膳に向ひ夜は床の中にもぐりこむのみ氣取りて申さば閑中の閑、靜中の靜を領する之俗に申せば錢のなきため不得已握り罫丸をしてデレリと陋巷にたれこめて御座る之此休みには「カーライル」の論文一冊を讀みたり二三日前より「アルノルド」の「リテレチユア、エンド、ドクマ」と申者を讀みかけたり御前兼て御趣向の小說は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文體を用ひ給ふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試むる積りに候へとも兎角大兄の文はなよなよとして婦人流の習氣を脫せず近頃は篁村流に變化せられ舊來の面目を一變せられたる樣なりといへとも未だ眞率の元氣に乏しく從ふて人をして案を拍て快と呼ばしむる箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直敍スルガ妙味と被存候さればこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天眞爛熳の見るべきなければ人を感動せしむること覺束なからんかと存候今世の小說家を以て自稱する輩は少しも「オリヂナル」の思想なく只文字の末をのみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模樣仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の價値はと問はゞ三文にも當せず其思想はと問はゞ一顧の價なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの樣に被思候獨り篁村翁のみは直ちに胸臆を直敍して天眞爛熳の風姿紙上に躍然たる處なきにあらねど是亦質朴なる老翁のいやみ氣なきに過ぎず田舍漢の通がりにまさる萬々なりといへ共さりとも端肅とか遒麗とか磊落とか人をして一見嘆賞感動せしむる風采には乏きやに被存候故に小生の考にては文壇に立て赤幟を萬世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を敍し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法抔は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の價値を增減スル程の事は無之樣に被存候御前も多分此點に御氣がつかれ居るなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕る之勿論書くのが樂なら無理によせと申譯にはあらねど毎日毎晩書て〳〵書き續けたりとて子供の手習と同じことにて此 original idea が草紙の內から靈現する譯にもあるまじ此 Idea を得るの樂は手習にまさること萬々なること小生の保證仕る處なり（餘りあてにならねど）伏して願はくは（雜談にあらず）御前少しく手習をやめて餘暇を以て讀書に力を費し給へよ御前は病人之病人に責むるに病人の好まぬことを以てするは苛酷の樣なりといへども手習をして生きて居ても別段馨しきことはなし knowledge を得て死ぬ方がましならずや塵の世にはかなき命ながらへて今日と過ぎ昨日と暮すも人世に happiness あるが爲之されど十倍の happiness をすてゝ十分の一の happiness を貪り夫にて事足り給ふ

と思ひ給ふや併し此 Idea を得るより手習するが面白しと御意遊ばさば夫迄なり一言の御答もなし只一片の赤心を吐露して歳暮年始の禮に代る事しかり穴賢

御前此書を讀み冷笑しながら「馬鹿な奴だ」と云はんかね兎角御前の coldness には恐入りやす

十二月卅一日

漱石

子規御前

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

明治二十三年

一

一月 牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（八）

いそがしき手習のひまに長々しき御返事態々御つかはし被下候段御芳志の程ありい（洋語にあらず）かく迄御懇篤なる君様を何しに冷淡の冷笑のとそしり申すべきやまじめの御辯護にていたみ入りて穴へも入りたき心地ぞし侍る程に一時のたわ言と水に流し給へ七面倒な文章論かゝずともよきに、そこがそれ人間の淺ましさ終に餘計なことをならべて君に又攻撃せられて大閉口何事も餅が言はする雜言過言と御許しやれ

當年の正月は不相變雜煮を食ひ寐てくらし候寄席へは五六回程參りかるたは二返取り候一日神田の小川亭と申にて鶴蝶と申女義太夫を聞き女子にてもかゝる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心そこで愚兄余に云ふ樣「藝がよいと顏迄よく見える」と其當否は君の御批判を願ひます

米山は當時夢中に禪に凝り當休暇中も鎌倉へ修行に罷越したり山川は不相變學校へは出でこず過日十時頃一寸訪問せしに未だ褥中にありて煙草を吸ひ夫より起きて月琴を一曲彈て聞かせたりいつも〳〵のん氣なるが心は憂鬱病にかゝらんとする最中之是も貴兄の判斷を仰ぐ兎角此頃は學校でも吾黨の子が少ないから何となく物淋しく面白くなし可成早く御歸り〳〵もう仙人もあきがきた時分だろうから一寸已めにして此夏に又仙人になり給へ 云々

別紙文章論今一度貴覽を煩はす 云々

埋塵道人拜

四國仙人梧下

七章集四日大盡水戸紀行其他の雜錄を貴兄の文章と之文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候

〔別紙〕

僕一己ノ文章ノ定義ハ下ノ如シ

文章 is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文章ノ Essence ニテ words ヲ arrange スル方ハ element ニハ相違ナケレド essence ナル idea 程大切ナラズ經濟學ニテ申セバ wealth ヲ作ルニハ raw material ト labor ガ入用ナルト同然ニテ此 labor ハ單ニ raw material ヲ modify スルニ過ギズ raw material ガ最初ニナクテハ如何ナル巧ノ labor モ手ヲ下スニ由ナキト同然ニテ idea ガ最初ニナケレバ words' arrangement ハ何ノ役ニモ立タヌナリ

是ヨリ best 文章ヲ解セン

Best 文章 is the best idea which is expressed in the best way by means of words on paper.

此 under line ノ處ノ意味ハ idea ヲ其儘ニ紙上ニ現ハシテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處、(no more no less)ヲ感ゼシムルト云フ義ニテ是丈ガ卽チ Rhetoric ノ treat スル所之去レバ文章(余ノ所謂)ハ決シテ Rhetoric ノミヲ指スニ非ス此儀上ノ解ニテ御合點アリタシ

ソコデ此 idea ヲ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ次ハ己レノ經驗ナリ去レ𪜈己レノ經驗ノ區域ノミニテハ Idea ヲ得ル區域狹キ故 culture ノ方ガ要用ナリト申スナリ

然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テヽ他ノ方ナキハ貴君モ御左祖ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ去リ乍ラ Rhetoric ヲ廢セヨト云フニ非ス Essence ヲ先ニシテ form ヲ後ニスベク Idea ヲ先ニシテ Rhetoric ヲ後ニセヨト云フナリ(時ノ先後ニアラズ輕重スル所アルベシト云フノ意ナリ)

是ヨリハ嚴肅トカ端麗トカ云フ文章ヲ analytically ニ御示シ申スベシ

(1) 嚴肅ナル文章＝嚴肅ナル idea expressed by means of words.

(2) 適麗ナル文章＝適麗ナル idea expressed by means of words. etc.

故ニ idea ニシテ嚴肅トカ適麗トカ云フ形容詞ヲ附ケ得ベキ Idea ナラ紀行文デモ議論文デモ小說デモ何デモ嚴肅ナル又適麗ナル文章ト云ヒ得ル之

（然シ idea ニモ斯ル形容詞ヲ附シガタキ者アリ此 idea ヲ express スル文章ニハ到底カヽル形容詞ヲ附シ難シ此ハ scientific treatises ニテ見出ス物ニテ pure literary work ニハ何如ナル種類ヲ問ハズ斯ル形容詞ヲ付スルヲ得ベシト存ズ）

是ヨリ mathematically ニ Idea ト Rhetoric ノ combination ヨリ何如ナル文章ガ出來ルカヲ御目ニカケン

1 case
Idea = best
Rhetoric = 0 } make up no 文章

啞抔ハ best idea ガアルモ Rhetoric ナキタメ any speech ガデキヌ如シ但シコレハ文章ノ例ニアラズ

2 case
Idea = 0
Rhetoric = best } no 文章 imaginary case

3 case
Idea = best
Rhetoric = best } best 文章

4 case
Idea = bad
R = bad } bad 文章

5 case
Idea = best
R = bad } ordinary 文章

6 case
Idea = bad
R = best } bad 文章

此 last two cases ヲ比較セバ Idea ノ R ヨリ要用ナルヲ知ルベシ

此 cases ノ中 1 & 2 ハ殆ンド extreme ノ case デ實際ナシト云フモ可ナリ但シ尤 important トナルハ 5 & 6 ナリ元來 best Rhetoric トハ△ナラ△ノ idea ヲ Express シテ人ガ讀ンデモ同形同積ノ△ニ感ズルヲ云フニアラズヤ換言スレバ original idea ヲ original ノ儘ニ convey スルガ best Rhetoric ナリ故ニ假令 R ガ best ナリトモ idea ガ bad ナレバ bad ナ idea ヲ bad ナリニ convey スルニ過ギザレバ文章ハ bad ニシカナラズ之ニ反シテ R ハ bad ニテモ Idea ガ best ナレバ best ナ Idea ガ此 bad Rhetoric ノ爲メ幾分カ modify セラレテ best ナリニ express セラルヽ能ハズ單ニ ordinary ノ者トナルニ過ギザルナリ

小生ノ平タク無造作ニ飾氣ナク Idea ヲ express スルガ妙文ナリトハ (3) ノ case ヲ云フノミ卽チ best ナ Idea ヲ平タク無造作ニ best ナリニ讀者ニ感ゼシムル乄 (which is only possible by means of the best Rhetoric!) 章句ノ末ニ拘泥スルトハ第二ノ如キ case 乄 R ハ best ナレ𪜈 Idea ガ 0 ニ近ケレバ殘ンド no 文章ナリト云フ乄

君ノ三條ハ實ニ flimsy 極マルヨ
(1) 讀ム本ヲ知ラヌバ人ニ聞クガイヽデハナイカ
(2) 讀ム本ガナクバ買フデモ借リテモイヽデハナイカ
(3) 英文ガ讀メナケレバ勉强シテモヨシ已ムヲ得ズバ日本書漢籍ヲ讀ムデモイヽデハナイカ

君ノ云フ二條ノ文學者ノ目的ハ僕ハ大ニ不賛成ダケレ𪜈暫ラク君ノ云フ通リ右ノ二條ガ目的ナルニモセヨ君ノ所謂文章 (Rhetoric only) デ此目的ガ達セラルヽト思ヒ給フヤ又ハ (Rhetoric only) ガ此目的ヲ達スルニ最必要ナリト思ヒ玉フヤ今一度御勘考アラマホシウ

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

二

七月二十日　牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ　（九）

御經づくめに抹香くさき御文盃すぎにてちと時候おくれながら面白をかしく拜見仕候先以て御病體日々佛くさく被相成候段珍重奉存候此頃の暑は松山の邊土のみならず花のお江戸も同樣にて日中はさながら甑中の章魚同然中々念佛廻向抔の騷ぎにあらず唯々命に別條なきを賴りにて日々消光仕る仕儀なれは愛國心ある小生も此暑さをぢつとこらへて蒼生の爲じや百姓の爲じやとすましこんでゐられたものにあらず（尤血液の少なき冷血動物に近き貴殿抔は此限りにあらず）其上何の因果か女の祟りか此頃は持病の眼かよろしくない方で讀書もできずといつて執筆は猶わるし實に無聊閑散の極、試驗で責めらるゝよりは餘程つらき位之無事是貴人とは如何なる馬鹿の言ひ草やら今に至つて始めて其うそなる事を知れり實は此度非常の大奮發大勉强にて（吳服屋の引札にあらず）平生貯蓄せるポテンシャル、エナージーを化學的作用にてカイネチックに變じ九月上旬には貴殿の目を驚かしてやらんと心待ちに待ちたる甲斐もなくあら悲しや天吾才を妬みそう今から大學者になられては困るといふ一件で卑怯にも二豎を以て吾英氣を挫折せり狹くいへば國の爲め大きくいへば天下の爲め實に惜むべき事共なり併し小生が眼病の爲め貴殿九月になつて小生に面會するも別段目を驚かすともなく膽を寒からしむる程の騷動は出來せずに濟むから其點は安心すべしさ

（略）貴意の如く山川を落第させる位なら落第させる人はいくらでもある第一貴殿抔は落第志願

生だから同人と變つてやれば善いのにそこが人事の不如意で不得已次第さ

午眠の利益今知るとは愚か〳〵小生抔は朝一度晝過一度、廿四時間中都合三度の睡眠之書寐して夢に美人に邂逅したる時の興味抔は言語につくされたものにあらず晝寐も此境に達せざれば其極點に至らず貴殿已に晝寐の堂に陟るよろしく其室に入るの工夫を用ゆべし

曾て君が「西行の顔も見えけり富士の山」といふ句を自慢したが僕が先頃富士を見て不圖口を衝て出た名吟にはとても不及斯樣な手爵の後りに書くのは勿體なけれども別懇の間柄だから拜讀さすべし其名吟に曰く

西行も笠ぬいで見る富士の山

我ながら感々服々だ然しかやうの名吟を漫りに人に示すは天機を漏らすの恐れあり決して他言すべからず又くだらぬ隨筆中にたゝき込むべからず穴賢

漱石

子規病牀下

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

三

八月九日 牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一〇）

爾後眼病兎角よろしからず其がため書籍も筆硯も悉皆放抛の有樣にて長き夏の日を暮しかね不得已くゝり枕同道にて華胥の國黑甜之鄕と遊びあるき居候得共未だ池塘に芳草を生せず腹の上に松の木もはへず是と申す珍聞も無之此頃では此消閑法にも殆んど倦屈仕候といつて坐禪觀法は猶できず瀹茗漱水の風流氣もなければ仕方なく只「寐てくらす人もありけり夢の世に」抔と吟じて獨り洒落たつもりの處瘠我慢より出た風雅心と御憫笑可被下候然シ小生の病は所謂ずる〳〵べッたりにて善くもならねば惡くもならぬといふ有樣故風光と隔生を免かれたりと喜ぶ事もなきかはりには韓家の後苑に花を看て分明ならずといふ嘆も無之眼鏡ごしに籬外の秋海棠の哀れに咲きたるをすかしと眺むる位の事は少しも差支無之候去れば時々は庭中に出て（米山法師の如く蟬こそ捉らね）色々ないたづらを致し候茶の樹の根本に丹波ほうづきとかいふ實の赤く色づきて寐ころげたるを何心なく手折りて不圖心つけば別に贈るべき人もなし小さき妹にてもあれかしと願ふも甲斐なし撫し子の凋みたる間より桔梗の一株二株ひよろ長く延びいでたるが雨にうたれて苔を枕に打ち臥したるに紫の花びらを傳ひて小蟻の行きかふさま眼病ながらよく見えたり女郎花の時ならぬ粟をちらすを實の餌と思ひて雀の群がりて拾ふを見るに付偖々鳥獸は馬鹿な者だと思へどそういふ人間も矢張此雀と五十步百步なれば惡口はいへず朝貌も取りつく枝なければ所々這ひ廻つ

た末漸々松の根形にある四角張たる金燈籠に纒ひ付かなし氣にたつた一輪咲きたるは銹びつきて見る影もなき燈籠の面目なり病み上りの美人が壯士の腕に倚りけるが如しとでも評すべきか呵々先ヅ庭中の景は此位にておやめと致すべし

此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで〳〵立ち切れず去りとて自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんか「ファウスト」が自ら毒藥を調合しながら口の邊まで持ち行きて遂に飲み得なんだといふ「ゲーテ」の作を思ひ出して自ら苦笑ひ被致候小生は今迄別に氣兼苦勞して生長したといふ譯でもなく非常な災難に出合ふて南船北馬の間に日を送りしともなく唯七八年前より自炊の竈に顔を焦し寄宿舍の米に胃病を起しあるひは下宿屋の二階にて飲食の決闘を試みたりそれは〳〵のんき氣に月日を送り此頃は其にも倦きておのれの家に寐て暮す果報な身分でありながら定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず既に息竭き候段貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれも misanthropic 病なれば是非もなしいくら平等無差別と考へても無差別でないからおかしい life is a point between two infinities とあきらめてもあきらめられないから仕方ない

We are such stuff
　As dreams are made of; and our little life
　Is rounded by a sleep.

といふ位な事は疾から存じて居ります生前も眠なり死後も眠りなり生中の動作は夢なりと心得ては居れど左様に感じられない處が情なし知らず生れ死ぬる人何方より來りて何かたへか去る又しらず假の宿誰が爲めに心を悩まし何によりてか目を悦ばしむると長明の悟りの言は記臆すれど悟りの實は迹方なし是も心といふ正體の知れぬ奴が五尺の身に蟄居する故と思へば惡らしく皮肉の間に潛むや骨髓の中に隱るゝやと色々詮索すれども今に手掛りしれず只煩悩の焰熾にして甘露の法雨待てども來らず慾海の波險にして何日彼岸に達すべしとも思はれず已みなん〳〵目は盲になれよ耳は聾になれよ肉體は灰になれかしわれは無味無臭變ちきりんな物に化して

I can fly, or I can run,
　Quickly to the green earth's end,
　　Where the bowed welkin slow doth bend;
　　And from thence can soar as soon
　To the corners of the moon.

と申す樣な氣樂な身分になり度候、あゝ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか御文様の文句ではなけれど二ッの目永く閉ぢ一つの息永く絕ゆるときは君臣もなく父子もなく道德も權利も義務もやかましい者は滅茶〳〵にて眞の空々眞の寂々に相成べく夫を樂しみにながらへ居候棺を蓋

へば萬事休すわが白骨の鍬の先に引きかゝる時分には誰か夏目漱石の生時を知らんや穴賢

（略）小生箇樣な愚癡ッぽい手紙君にあげたる事なしかゝる世迷言申すは是が皮きりゝ苦い顔せずと讀み給へ

漱石拜

子規机下

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

四

月日不詳　八月末頃　牛込區喜久井町一番地より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（二）

さすが詩神に乘り移られたと威張られる御手際讀み去り讀み來つて河童の何とかの如くならず天晴れ〳〵かつぽれ〳〵と手を拍て感じ入候然し時々は詩神の代りに惡魔に魅入られたかと思ふ樣な惡口あり君此頃大變偈をかつぎ出す事が好きになつたから僕一偈を左右に呈すべし毎朝燒香して此偈を唱へ此惡魔を祓ひ給へ

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生　一切我今皆懺悔

女祟の攻擊晝寐の反對奇妙〳〵然し滑稽の境を超えて惡口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず其も貴樣の手紙が癪に障るからだと言はるれは閉口仕候悟道徹底の貴君が東方朔の囈語に等しき狂人の大言を眞面目に攻擊してはいけない（略）

詩神は佛なり佛は詩神なりといふ議論斬新にして面白し君能く色聲の外に遊んで淸淨無漏の行に住し自己の境界を寫し出されたとすれば敬服の外なし今より朋友の交を絕ち師弟の禮を以て贄を執り君の門に遊ばんかね然し例の臆測的揣摩的の議論なら一切御免蒙る（悟れ君）なんかと呶鳴つても駄目だ（狐禪生悟り）抔とおつにひやかしたつて無功とあきらむべし又理窟詰め雪隱詰めの悟り論なら此方も大分言ひ草あり反對したき點も澤山あれど此頃の天氣合ひ兎角よろしからず攫み合ひ取組合ひ果ては決鬪でもしなければならぬ樣になるとどつちが怪我をしても海內幾多の美人を愁殺せしむるといふ大事件だから一先づこゝは中直りをして置きましよう何れ九月上旬には詩神にのりうつられたといふ顏色しみ〴〵と拜見可仕候

君が散々に僕をひやかしたから僕も左の一詩を咏じてひやかしかへすゝ

江山容不俗懷塵。　君是功名場裏人。

憐殺病軀多客氣。　漫將翰墨論詩神。

君の說諭を受けても浮世は矢張り面白くもならず夫故明日より箱根の靈泉に浴し又々晝寐して

美人でも可夢候

仙人墮俗界。遂不免喜悲。啼血又吐血。憔悴憐君姿。
漱石又枕石。固陋歡吾癡。君痾猶可癒。僕癡不可醫。
素懷定沈鬱。愁緒亂如絲。浩歌時幾曲。
一曲唾壺碎。二曲双涙垂。曲闋呼咄々。衷情欲訴誰。
白雲蓬勃起。天際看蛟螭。笑指函山頂。去臥葦湖湄。
歲月固悠久。宇宙獨無涯。蜉蝣飛湫上。大鵬嗤其卑。
嗤者亦泯滅。得喪皆一時。寄語功名客。役々欲何爲。

眞に塵陋で詩とも何とも申し樣御座なく候へ共何となく出來仕候間御笑ひ草に御目にかけ候何卒御叱りなく御添删の程偏に奉願候（どうだ此位卑下したらさすがの君もよもや犬の糞の讎きうちは爲されまい）

露地白牛

正岡詞兄

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

明治二十四年

一

四月二十日 才便　牛込區喜久井町一番地より　本鄕區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ（一二）

狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん君が芳墨を得て始めは其唐突に驚ろき夫から腹を抱へて滿案の哺を噴き終りに手紙を掩ふて泣然たり君の詩文を得て此の如く數多の感情のこみ上げたるは今が始めてなり君が心中一點の不平俄然炎上して滿腦の大火事となり餘焰筆頭を傳はつて三尺の半切に百萬の火の子を降らせたるは見事にも目ばゆき位なり平日の文章心を用いざるにあらず修飾なきにあらず只狂の一字を缺くが故に人をして瞠若たらしむるに足らず只此一篇狂氣爛熳わが衷情を寸斷しわが五尺の身を戰栗[原]せしむ七草集はものかは隱れみのも面白からず只此一篇……

嗚呼狂なる哉狂なるかな僕狂にくみせん僕既に狂なる能はず甘んじて蓄音器となり來る廿二日午前九時より文科大學哲學教場に於て團十郎の假色[原]おつと陳腐漢の囈語を吐き出さんとす蓄音器

となる事今が始めてにあらず又是が終りにてもあるまじけれど五尺にあまる大丈夫が情けなや何の果報ぞ自ら好んでかゝる器械となりはてたる事よ行く先きも案じられ年來の望みも烟りとなりぬ梓弓張りつめし心の弦絶えて功名の的射らんとも思はざれば馬鹿よ白癡と呼ばれて一世[原]を過し蓄音器となつて紅毛の士に弄ばるゝも亦一興ぞかし

左様なら

廿日夜　　平凸凹

倫花兒殿

二

七月九日　ル便　牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一三）

觀劇の際御同伴を不得殘念至極至極殘念（宛然子規口吻）去月廿日曇天を冒して早稻田より歌舞伎座に赴くぶら〳〵あるきの錢いらず神樂坂より車に乘る烈しかれとは祈らぬ南風に車夫よたよたあるきの小言澤山否とよ車主さな怒り給ひぞ風に向つて車を引けばほろふくるゝの道理ぞかし と說諭して見たれど車耳南風にて一向埒あかず十時半頃土間の三にて仙湖先生を待つ程なく先生到着錬鄕をつれて來ると思ひの外岩岡保作氏を伴ひし時こそ肝つぶれしか（再模得子規妙）団より年來の知己なれば否應なしに枡に引つぱり込んで共に見物す枡の内より見てあれば團十郎の春日の局顏長く婆々然として見苦し然し御菓子頂戴御壽もじよろしい口取結構と舞臺そつちのけのたら腹主義を實行せし時こそ愉快なりしか。仙湖先生は頻りに御意に入つてあの大きな眼球から雨滴程な涙をこぼすやつがれは割前を通り越しての飲食に天咎のがれ難く持病の疝氣急に胸先に込み上げてしく〳〵痛み出せし時は芝居所のさわぎにあらず腰に手を當て顏をしかめての大ふさぎはたの見る目も憐なり腹の痛さをまぎらさんと四方八方を見廻はせば御意に入る婦人もなく只一軒おいて隣りに圓遊を見懸けしは鼻々おかしかりしなあいつの痘痕と僕のと數にしたらどちらが多いだらうと大に考へて居る内いつしか春日の局は御仕舞になりぬ公平法問の場は落語を實地に見た樣にて面白くて腹の痛みを忘れたり

惣じて申せば此芝居壹圓以上の價値なしと歸り道に兄に話すと田舍漢が始めて寄席へ行と同じ事でどこが面白いか分るまいと一本鎗込られて僕答ふる所を知らずそこで愚兄得々賢弟默々

今日學校に行つて點數を拜見す君の點で缺けて居る者は物集見[原]の平生點（但し試驗點は七十）と小中村さんの點數（是は平生も試驗も皆無だよ）餘は皆平生點ありじくそんは平生87に試驗46先以て恐悅至極右の譯だから小中村の平生點六十以上と物集見の平生點六十以上あれば九月に試

驗を受る事が出來る然し今のまゝでは落第なり
先は手始めの御文通迄餘は後便
九日午後　　　　　　　　　　　金之助
正岡常規さま

三

七月十六日　ヌ便　牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一四）

貴地御安着日々風流三昧に御消光の事と羨望仕居候小弟不相變宰予の弟子と相成雕しがたき朽木をごろ〳〵持ちあつかひ居候
小中村物集見〔原〕平常點の義に付き敎務掛りへ照會致候處一日も早く御差出し有之可くとの事故去る十二日芳賀矢一君方へ參り右の談判相賴み候處小中村は當時伊香保入浴中の由にて早速木幕金太夫方へ同氏より書狀差し出しもらひ候
物集見へも同日同時に賴み狀同人より相つかはし候但し兩人とも不承知なら返事をよこす筈承知なら何とも云ふて來ぬ筈なり今迄何ともいふて來ぬ故出して〔原〕來れたに相違なしと斷定する者なり（尤も此頃の暑さに恐れて學校へは參り不申）由て來る九月に追試驗の御覺悟にて隨分御勉强可被成候」
芳賀氏訪問の節同人の話しに來る九月より大學にて文學會雜誌といふ者を發兊する都合にて其手順とゝのいたる赴きに御座候過日大兄と御話しの件不圖實行の緖につきたるは隨分奇妙月旦は發兊の上の事何しろ大學の名譽に關せぬ樣願度者也大兄も一臂の御盡力あつては如何（おいやでげすかね）
先は用事迄餘は後便
此手紙二本目に付無性者の本性として非常の亂筆なりおゆるしあれ
盆の十六日　　　　　　　　　　　平凸凹
物草次郎樣
こもだれの中
試驗は是非受ける積りでなくては困ります

四

七月十八日　ル便　牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一五）〔封筒の表側に「眞言祕密封じ文」とあり〕

去る十六日發の手紙と出違に貴翰到着早速拜誦仕候人をけなす事の好きな君にほめられて大に面目に存候嗚呼持つべき者は友達なり

愚兄得々賢弟默々の一語御叱りにあづかり恐縮の至り以來は愼みます

御歸省後御病氣よろしからざるおもむきまことに御氣の毒の至に存候左樣の御容體にては强いて在學被遊候とても詮なき事御老母のみかは小生迄も心配に御座候得ば貴意の如く撰科にても御辛抱相成る方可然人爵は固より虛榮學士にならなければ飯が食へぬと申す次第にも有之間じく候得ば命大切と氣樂に御修業可然と存候夫に就ても學資上の御困難はさこそと御推察申上候といふ迄にて別段名案も無之、いくら僕が器械の龜の子を發明する才あるも開いた口へ牡丹餅を抛りこむ事を知つて居るとも是ばかりはどうも方がつきませんなそれも僕が女に生れていれば一寸靑樓へ身を沈めて君の學資を助るといふ樣な乙な事が出來るのだけれど……夫も此面ではむづかしい

試驗癈[原]止論貴察の通り泣き寐入りの體裁やつた所が到底成功の見込なしと觀破したね

ゑゝともう何か書く事はないかしら、あゝそう〳〵、昨日眼醫者へいつた所が、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね、――〔銀〕杏返しに竹なは(たけなが)をかけて――天氣豫報なしの突然の邂逅だからひやつと驚いて思はず顏に紅葉を散らしたね丸で夕日に映ずる嵐山の大火の如し其代り君が羨ましがつた海[原]氣屋で買つた蝙蝠傘をとられた、夫故今日は炎天を冒してこれから行く

七月十八日　　凸凹

物草次郎殿

五

七月二十四日　ヌ便　牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一六）〔はがき〕

御返事咒文

燬盡朱顏爛痘痕失來輕傘却開昏癡漢悟道非難事吾是宛然不動尊（大兄の咒文を三誦して悟りたる境界に御座候）

岐岨道中の詩拜見佳句も澤山ある樣なり次韻したけれどそう急には出來ず昨日故人五百題と云ふ者を見て急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり御笑ひ草に供したけれど端書故いづれ後便にて御斧正相願度候

六

八月三日　ル便　牛込區喜久井町一番地より
松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（一七）

一丈餘の長文被下難有拜見小子俳道發心につき草々の御教訓情人の玉章よりも嬉しく熟讀仕候天稟庸愚のそれがし物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候得共性來かゝる道は下手の横好とやらに候得ば向後驥尾に附して精々勉强可仕［候］間何卒御鞭撻被下度候

玉作數首謹んで拜見俳句はいづれも美事に御座候仰せの如く句調の具合先日中拜見仕候者と㒵かに別機軸の御手際と感心仕候峽中雜詩第一五首中の翹楚と存候管々しき細評は佛頭の天糞とやらにつき御免蒙り候實は負けぬ氣に次韻でもして君の一粲を博せんと存居候處去月下旬一族中に不慮の不幸を生じ其が爲め彼是取紛れ只今にては硯に對する閑暇はあれど筆を執る忍耐力なく幼學詩韻をひねくり廻す騷ぎにも參り兼候間次韻の義も願下に致候

不幸と申し候は餘の儀にあらず小生嫂の死亡に御座候實は去る四月中より懷姙の氣味にて惡疽[原]と申す病氣にかゝり兎角打ち勝れず漸次重症に陷り子は闇より闇へ母は浮世の夢廿五年を見殘して冥土へまかり越し申候天壽は天命死生は定業とは申しながら洵に〳〵口惜しき事致候

わが一族を賞揚するは何となく大人氣なき儀には候得共彼程の人物は男にも中々得易からず況て婦人中には恐らく有之間じくと存居候そは夫に對する妻として完全無缺と申す義には無之候へ共社會の一分子たる人間としてはまことに敬服すべき婦人に候ひし先づ節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる抔生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候位鬚髯鬖々たる生悟りのえせ居士はとても及ばぬ事小生自から慚愧仕候事幾回なるを知らずかゝる聖人も長生きは勝手に出來ぬ者と見えて遂に魂歸冥漠魄歸泉只住人間廿五年と申す場合に相成候さはれ平生佛けを念じ不申候へば極樂にまかり越す事も叶ふ間じく耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覺束なく一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描きここかしこかと浮世の羈絆[原]につながるゝ死靈を憐みうたゝ不便の涙にむせび候母を失ひ伯仲二兄を失ひし身のかゝる事には馴れ易き道理なるに一段毎に一層の悼惜を加へ候は小子感情の發達未だ其頂點に達せざる故にや心事御推察被下たく候

悼亡の句數首左に書き連ね申候俳門をくゞりし許りの今道心佳句のあり樣は無之一片の衷情御酌取り御批判被下候はゞ幸甚

朝貌や咲た許りの命哉

細眉を落す間もなく此世をば　（未だ元服せざれば）

人生を廿五年に縮めけり　（死時廿五歳）
君逝きて浮世に花はなかりけり　（容姿秀麗）
假位牌焚く線香に黒む迄
こうろげの飛ぶや木魚の聲の下　（三首通夜の句）
通夜僧の經の絕間やきり〴〵す
骸骨や是も美人のなれの果　（骨揚のとき）
何事ぞ手向し花に狂ふ蝶
鏡臺の主の行衞や塵埃　（二首初七日）
ますら男に染模樣あるかたみかな　（記念分）
聖人の生れ代りか桐の花　（其人物）
今日よりは誰に見立ん秋の月　（心氣淸澄）

先日御話しの句左に抄錄す是亦御郢正奉願候

馬の背で船漕ぎ出すや春の旅
行燈にいろはかきけり獨旅
親を持つ子のしたくなき秋の旅
さみだれに持ちあつかふや蛇目傘
見るうちは吾も佛の心かな　（蓮の花）
螢狩われを小川に落しけり
藪陰に涼んで蚊にぞ喰はれける
世をすてゝ太古に似たり市の內
雀來て障子にうごく花の影
秋さびて霜に落けり柹一つ
吾戀は闇夜に似たる月夜かな
柹の葉や一つ一つに月の影
涼しさや晝寐の貌に靑松葉
あつ苦し晝寐の夢に蟬の聲
とぶ螢柳の枝で一休み
朝貌に好かれそうなる竹垣根
秋風と共に生へしか初白髮

先づこんな物に御座候向來物になられませうか
鷗外の作ほめ候とて圖らずも大兄の怒りを惹き申譯も無之是も小子嗜好の下等なる故と只管慚愧致居候元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全體を窺ふ事かたく候得共當世の文人中に

ては先づ一角ある者と存居候ひし試みに彼が作を評し候はんに結構を泰西に得思想を其學問に得行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候尤も人の嗜好は行き掛りの敎育にて（假令ひ文學中にても）種々なる者故己れは公平の批評と存候ても他人には極めて偏窟な議論に見ゆる者に候得ば小生自身は洋書に心醉致候心持ちはなくとも大兄より見れば左様に見ゆるも御尤もの事に御座候全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來學問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候事と存じ夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陷ざらん様に心掛居候其上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず日本が[原]夫程好き者のあるを打ち棄てゝわざ〳〵洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候性來多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑

頃日來司馬江漢の春波樓筆記を讀み候が書中往々小生の云はんと欲する事を發揮し意見の暗合する事間々有之圖らず古人に友を得たる心にて愉快に御座候此は序ながら申上候

時下炎暑の砌り御道體精々御いとひ可被成候　拜具

八月三日　平凸凹拜

のぼるさま

七

九月十二日　チ便　牛込區喜久井町一番地より
埼玉縣大宮驛氷川公園萬松樓高島方正岡常規氏へ（一八）

屁理窟を海容の上はちときびし過ぎる、なれど御採用にあづかりて千萬辱けなし試驗の可否今日念の爲め小泉と談判に及び候ところ異論のあるべき筈なく御都合次第敎師と相談の上御受驗可被遊との趣に候向後一週間位の中に完結可致規則にやと問返したれば否左にあらず今少々は後れてもよろしく然し可成早き方こそ望ましけれといふ次第なれば下讀濟次第御歸京目前の障礙御取り祓[原]ひ可被成候小生抔は心の不平のみならず顏も一面に不平なれば君よりは申し分もある筈なるに大人しく今迄辛抱致し居候へば大兄も少しは苦しむ方朋友へ對しての義理なり試驗の問題は悉く忘れたれば菊地[原]より逡つてもらふ筈然し問題外の處も目を通さなくつては困るぜ何しろ下讀濟

次第御歸京可然候
餘は拜眉の上

十二日午後　　　　平凸凹

もの草次郎どの

八

十一月七日　ヌ便　牛込區喜久井町一番地より
本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ（一九）

思ひ掛なき君が思ひがけなくも明治豪傑譚に氣節論まで添へて御惠投あらんとは眞以て思ひがけなく驚入候何は偖ありがたく受納仕候御手紙は再三操[原]返し豪傑譚は興味に連れ一息に讀了仕候當時少しく風邪の氣味にて腦巓岑々の折柄はからずも半日消閑の工夫を得申候段拜謝仕候

豪傑譚は仰せの如く先頃中より讀賣紙上にて時たま閲覽仕居候其頃より是が豪傑の行爲にやと不審を抱き候角も不少欣慕抔と申す感情は偖置中には眉を蹙めて卻走せんと欲する件りも有之昨日興味につれ讀了候は聊も感服敬服抔と申す念慮より生じたる事に無之編中人物の行爲矯激極端にして殆んど狂縱の痕跡あるかを疑ふ位故何となく好奇の念禁じがたく一部の天然滑稽戲を披覽する心地にて通過致し偖卷を掩ふて是等の人物が如何に小生の心緒を攪動せしやと諦觀仕候へば寸毫も高尚だの優美だのと申す方向に導びきし點無之中には索隱行怪の餘弊殆んど人をして嘔吐を催ふせしむる件りも有之やに見受られ候かく申せばとて編中の人間皆氣節なき「グータラ」のみと申す次第には無之中には仰の如き稜々たる風骨を具したる人も有之べく其代りには一點の意氣地なき輩も交り居るべくそも氣節と申すは己れに一個の見識を具へて造次顚沛の際にも是を應用し其一生を貫徹するの謂に候得ば其人の氣節の有無は其人の前後を通觀せず候ては全體上其人の行爲が其人の主義と竝行するや否やは判じ難きかと存候今此編に記載する件りは單に豪傑の（流俗の豪傑）一言半行位にとゞまりて其人の氣節を斷定するの材料には爲し難きやと存候先づ書中の事件を大別すれば第一卽座の頓智、第二其場の激情等多く之に屬せざるものは或は何人の生活中にも穿鑿したらば出てきさうなる失策話しか尋常一樣の世間話しにて偶其人が後日に盛名を博したる爲め役もなき好奇漢の詮議立てより是も豪傑の行ひぞと人に云はるゝに至りたる件りも見受け候位是等は此失策話しが豪傑の傳を構造するにあらずして豪傑の盛名が遡つて此失策話しを著名にしたるに過ぎず猶分類せば他の族門をも設け得ん其中には欣慕と迄行かずと「も」感心な行ひと賞する位の事は曉星のごとくちらほらと見ゆる事もあらんなれど先づ右の三種と大別した處で卽座の頓智と云ふ事は其人天稟の賦性にて能もあり不能もあり頓智あるが爲に氣節あり

頓智なきが爲に氣節なしとは誰も許さぬ事なるべし否氣節を尊む人は場合に依れば出る頓智もわざわざ引き込す事あり是は其人の行爲を支配するものは一定の主義にして頓智とは卽座の出放題其場逃れの便宜なれば苟も頓智にして己れの主義と相反する以上は一時の便宜は偖おきかゝる方便を用ゆる事あるべからずよしんば頓智が己れの氣節を貫くに必要なる場合ありとするもかゝる能を有せざる人は到底用ゆる事の出來ぬ話しなり第二に一時の激昂にて感情的に爲したる事が氣節を表影（原）すと云ふも受取りがたし氣節とは前にも云ふ如く（余の考へにては）一定斷乎の主義を抱懷して動かざるに外ならず己れに特有なる一個の標準を有しこの標準を何處にも應用せんとするの觀念に過ぎず一時の感情若し此標準と合せば卒然の行爲必ずしも氣節を發揮せずとは云ひ難けれど感情はいつも智識と竝行して起るものにあらず、のみならず屢ば背馳して相戻る事あるは君の知る所なれば此點にても氣節の有無は知りがたからん第三種に屬する失策話し（逸話にせよ）は吾人の生活中日々眼前に横たはるものにて中にも小生抔は人一倍失策多ければ若し之を以て氣節の發したるものとせば僕抔は風骨稜々の冠を戴くを得べし兎に角失策は豪傑に限りて多きにあらず又氣節あるが爲に大なるにあらず是は申す迄の事もなからんかく右の三者何れをとるも編中の人物に氣慨ありや否やを判ずるの材料とは致し難くはなきやと愚考仕候今一歩を讓つて此片言隻行の間に豪傑の氣宇躍然としてあらはるゝにもせよ編中の人は皆同鑄型中に鍛錬せられたるにあらず甲の爲す處は乙の爲す處と牴牾し丙の言ふ所は丁の言ふ所と隔違す或人は鹽を振りかけられたろさへ辛抱し或人は師の敎訓に堪へずして長者を擊つ一方が氣節あらば一方は意氣地なきなり一方が風骨を有するならば一方は馬骨を有するなり君何が故に稜々の字を下して軒輊する所なきや君が意は其行爲の裏面に横たはる精神を見よとの事なるや精神を見るも二人の心行きは決して同じからず一は堪忍を大事となし一は任意直情を潔しとせるなり堪忍の方が氣節あらば任意の方氣節なきなり但し兩方共に氣節ありと云ふや職を高官に奉じて座睡禁ぜず是耄碌なり氣節にあらず格鬪を挑まれて敢てせず之を酒樓に誘つて逃る是れ卑怯なり（昔しの武士道より見れば）氣節にあらず故に假令ひ氣節をして片言隻行の間にあらはるゝものとするも編中の事悉く氣節的の件りのみとは云ひ難からんと存候君若し以上の論議に不同意ならば再び方針を轉じて總概的（エキゾースチーブ）に氣節の何物たるを說明致さんと存候御存じの如く人間の能力は智、情、意の三者に外ならず氣節は人間能力の一部なる以上は三者の中何「れ」にか屬せざるべからず第一氣節とは情に屬するやと云ふに決して然らず一時の怒りに激して人を痛罵す是氣節なりや余は氣節とは思はざるなり年來の怒りに激して日常人を痛罵す是氣節なりや是も亦氣節とは思はれずさらば一時の感情にもせよ年來の感情にもせよ感情を以て爲したる行爲は氣節と云ふ可からず氣節旣に感情に屬せずんば之を意志の作用とせんか打つ可きの道理なく打ち度の感情なく妄りに鐵拳を擧て人に加ふ是れ氣節なりや同じく打つ可きの道理なく又打ち度の念慮なきに日常鐵拳を擧げて人に加ふ亦氣節にあらず去らば一時の意志にせよ年來の意志にせよ意志より來るもの氣節なりと云ふべからず意志に屬

せず感情に屬せずんば氣節の屬する處は智の範圍内にあらずんばあらず親には孝を盡すべき理ありと心得て孝を盡す是氣節なり君に忠を致すべき道存すとて忠を致す是氣節なり人を罵しるべきの理あり故に罵しる人を打つべきの理あり故に打つ是氣節なり然れど一時の理を行ふ是れ一時の氣節を表はすのみ一小見識を抱いて之を行ふ是れ一小見識の氣節のみ一時の氣節一小見識の氣節有もよし無くとも差支へなし吾人の欲する所は絶大見識を抱懷して人生の前後を貫き通ずるにあり書物にても一頁[原]には一頁の主意あり文字あり一篇には一篇の主意あり文字あり一卷には一卷を貫くの主意あり文字なかる可らず一頁の主意一篇の文字は一時の氣節一小見識の氣節のみ人生五十年の浩帙人生天大の主意決して一章一篇の中に存せざるなり故に僕謂ふ氣節は情に屬せず意に屬せずして智に屬す而して大氣節は人生を掩ふ大見識に屬すと君若し氣節は情若くは意に屬すと云はゞ僕一言なし唯見解の異なるを悲しむのみ君若し氣節は小見識を一時に行ふにありといはゞ僕又一言なし愈見解を異にするを悲しむなり

小生元來大兄を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て氣節の手本にせよとてわざ〳〵惠投せられたるはつや〳〵其意を得ず小生不肖と雖モ亦人生に就て一個の定見なきにあらず此年頃日頃詩を誦し書を讀むも讀むに從ひ誦するに從つて此定見の自然と發達して長大になるが爲めのみ徒らに彫琢の末技に拘[原]して一字一句の是非を論ずるは愉快なきにあらず然れども遂に小生が

心を滿足せしむるに足らざるなり去れど小生とて我が見識こそ絶大なれと云ふにあらず若し吾が主義の卑野ならんか大兄の高説を拜聽して其愚を癒するも可なり前賢の遺書に因て之を啓發するも可なり何を苦んで此蕞爾たる一俗冊を用いん君此書を讀んで自ら思へらく日本男子の區域外に放逐せられて饕餮飽くなきの蠻夷と伍するに至らざるを喜こぶなりと然れども君の目して蠻夷となすもの饕餮飽くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一半は鴃舌の書中より脱化し來つて余が腦中にあり此腦中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其輕き事秋毫の如し君何を以て此書を余に推擧するや余殆んど君の余を愚弄するを怪しむなり君の手翰を通觀するに字義共に眞面目にして通例滑稽的の文字にあらず且つ結末に（僕が之を贈るの微意を察せよ）とあり小子翻讀再三に及んで猶其微意の在る所を知るに苦しむ不敏の罪逃るゝに由なきは是非なし但し小子は賢愚無差別高下平等の主義を奉持するものにあらず己より賢なるものを賢とし己より高きものを高しとするに於ては敢て人に遜らずと雖モ此編中の人吾より賢なる人吾より高き人吾の取て以て崇拜せんと欲するもの果して幾人かある由しや之れありとするも君の余に勸めんと欲するものは抽象的の氣節にして實體的の片言隻行にあらず余も三尺の童子にあらざれば此片言隻行を誦して氣節こゝにありと歎賞する能はず故に聊か疑を書して机下に呈す

君の書に曰く試みに學校の兒童を見よ工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然

れども其學校を出づるや工商の子弟は終に士家の子弟に「一籌を」輸するを常とすと是は君一家の經驗にて云ふなるか統計抔にて云ふや（僕嘗て曰ふ）とあれば貴君一家の說なるべし然し小生の居りし學校にては工商の子弟より士家の子弟常に上席を占めたりかく事實相反する以上は議論の土臺と爲り難し且つ學校を出でゝ商工の子「弟」が士家の子弟に一籌を輸すとは學問の點なりや世渡りの巧拙なりやはた君の所謂氣節の點なりや學問の點より云へば商工は商工の業あり專意學問に從事する事能はず士家の子弟は學を以て身を立つるもの多ければ商工の及ばざるは勿論の話しなり世渡りの巧拙に至つては容易に斷言しがたし商工は世に應じて甘く切りぬけ行くもの澤山ならん士人の子弟にても御鬚の塵を拂ひおべつか專一にて世に時めく者幾千萬なるを知らず又氣節の點に至つても商工の子無下に意氣地なしと思ひ給ふ可からず身分〳〵に應じて相應の意地はあるものなり但し無學なる工商に望むに絕大の見識を以てするは赤子をして郵便配達夫たらしめんとするが如し云はずとも分り切た話しなり之に反して士人の子と雖ｔあながち氣節ある人多しとは云ふ可らず方今紳士とも云はるゝ輩靑萍とも浮草とも評すべき行爲あるもの枚擧すべからず其身元を尋ねたらば大方は士族なるべし兎に角氣節の有無抔は敎育次第にて工商の子なりとて相應の敎育を爲し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覺えず暫らく氣節は士人の子の手に落ち工商の夢視せざる處とするも是は工商たるが爲に氣節なきにあらずして氣節を涵養するの時機に會せざりしのみ試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば數年を出ず

して銅臭の兒とならん君の議論は工商の子たるが故に氣節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ君何が故「に」かゝる貴族的の言語を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す

君又曰く僕は賢愚の差に於て人を輕重する事少し然れども善惡の違に至つては一步もこれを假さず小惡あれば卽ち極口之を罵詈し小善あれば則ち極口之を褒美す……僕之を以て得意となす他人の毀譽敢て關せざるなりと君既に他人の毀譽に關せず其主義を貫かんとす故に僕敢て君を褒貶せず然れども善惡の差を重んずる事君の云ふ所の如くならば願くは僕が言の善か惡かを聞け君が腦中には至善なる理想あり此理想を標準として他を褒貶せらるゝならん然るに世界の人間中君が理想を以て嚴正なる判定を下し是人こそ至善なれと君が道德試驗に滿點を得て及第する者ありや余は斷じてかゝる人間なしと云はん人は完全なる者にあらず頭の頂點より足の爪足まで圓滿の德を具へたる聖人は實際世間に存するものにあらず人間の思想は實より空に入り卑より高きに推移す實を離れたる善世間より高きの善是れ君が腦中の理想なり此理想の尺度を以て此善惡混合の人間をはかる決して合格者あるべからず若し合格者なきときは君朋友中に於て又知人中に於て遂に一人も君の意に合する者を見出す能はざらんとす見出す能はざれども之を我慢すれば差支へなし然し君の如く善惡の差に於ては一步も假さずと云ふ以上は君遂に滿天下を見渡して一の交る可き者なく言語を交はす者なきを見ん若し又善は善でとり惡は惡としてすつると云ふ意ならば君既に

善を褒すると同時に惡を寬假したるなり由しや惡を寬假せずとするも若し一人に接して毫末の惡を見出し彼れ談ずるに足らずとて之を嫉視せば彼人假令ひ他に蓋世の善あるも君遂に其善を知る能はずして已まん又彼れ涓滴の善ありとて之に交はるとも其人滔天の惡ある以上は之を奈何すべき必竟人間界にては善は善惡は惡と範圍を分ち善の區域にあるものは生涯惡を見ず惡の領分に居るものは終身善を知らずと云ふ樣な勝手な事は行はるゝものにあらず何人にても取るべき所あり又貶すべき所あり君既に寸善を容るゝの量あらば又分惡を包むの度なかるべからず乍失禮君の一身でさへ前後を通看したなら機微の際忽然として惡念の心頭に浮びし事あるべし（假令ひ之を行はぬにもせよ）何となれば人間は善惡二種の原素を持つて此世界に飛び出したるものなればなり若し人性は善なりと云はゞ惡と云ふ事を知るべきの道理なし惡と云ふ事を行ふ筈なし善惡二性共に天賦なりとせば善を褒すると同時に不善をも憐まざるべからず今君眦睚の不善を假さずして終身之を忘れずんば僕實に君が慈憐の心に乏しきを嘆ぜずんばあらず僕思ふに君實にかゝる主義を應用するにあらず論じて筆端に上る「に」至つて遂に此過激の文字となりしならん先年僕が厭世の手紙の返事に天下不大瓢不細の了見で居るべしと云ひ給へり其了見で居る君が斯る狹隘なる意見を述べて（得意となす）抔云ふに至つては實に前後の隔絕せるに驚かずんばあらず先に云ふ處のものは單に壯言大語僕を驚かせしなれば僕向後決して君を信ずまじ又冗談ならば眞面目の手紙の返事にかゝる冗談は癈[原]して貰はんと存ず又先年の主義を變じ今日の主義となしたりと云はゞ夫

でよし人間の主義終始變化する事なければ發達するの期なし變じたるは賀すべし然し變じ方の惡きは驚かざるを得ず高より下に上り大人より小兒に生長したる樣な心地するなり僕決して君を誹謗するにあらず唯君が善惡の標準を以て僕が言の善か惡かを量れ

實は默々貰ひ放しにしておかんと存じたれどかくては朋友切磋の道にあらず君が眞面目に出掛たものを冷眼に看過しては濟まぬ事と再考の上好んで忌諱に觸る狂妄多罪

十一月七日

金之助拜

常規殿

九

十一月十一日　ロ便　牛込區喜久井町一番地より　本鄕區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ（二〇）

僕が二錢郵券四牧[原]張の長談議を聞き流しにする大兄にあらずと存居候處案の如く二牧張の御返禮にあづかり金高より云へば半口たらぬ心地すれど芳墨の眞價は百牧の黃白にも優り嬉しく披見仕候仰の如く小生十七八以後かゝるまじめ腐つたる長々しき囈語を書き連ねて紙筆に災ひせし事

なく議論文抔は君に差上候手紙にも滅多に無之唯君の方で足下呼はりで六づかしく出掛られた故つい乗氣になり色々の雜言申上恐縮の至に不堪決して〳〵御氣にかけられざる樣願上候

頑固の如くには候へども片言隻行にては如何にしても氣節は見分けがたくと存候良雄喜劍の足を舐る良雄の主義人の辱を受けざるにあれば足を舐るは氣節を損したるなり良雄の主義復讐にあれば足を舐るは氣節を全ふしたるなり喜劍良雄の墓前に死す喜劍の主義長生にあらば墓前に死するは節を損したるなり喜劍の主義任俠にあれば墓前に死するは節を全ふしたるなり去れば一言一行を其人の主義に照り合せざれば分らぬ事と存候（其人の主義の知れてゐる時は例外）

氣節は（己れの見識を貫き通す）事と申し上候積り此（見識）は智に屬し（貫く）（卽ち行ふ）は意に屬す行はずして氣節の士とは小生も思ひ申さず唯行へと命令する者が情にもあらず意にもあらず智なりと申す主意に御座候處筆が立ぬ故其所迄まはり兼疎漏の段御免被下度候

僕決して君を小兒視せず小兒視せば笑つて默々たるべし八錢の散財をした處が君を大人視したる證據なり恨まれては僕も君を恨みます

君は人の毀譽を顧みず毀譽を顧みぬ君に喃々するは君を褒貶するの意にあらず唯僕の說が道德上嘉すべき說なりや道德上惡しき說なるやを判じ給へとの意に御座候唯卑說の論理に傾きたる爲め善惡の字を以つて正否の字に見違へらる是亦僕の誤り（說に善惡あり又眞僞あり多妻論は耶蘇敎徒より見れば論理的なると否とを問はず惡說なり進化主義も神造物者主義より見れば惡說なり社會主義は高天原連より見れば惡說なり）

「其惡を極口罵詈せしとて其人と交らぬと云ふにはあらず」御說明にて恐れ入候叩頭謝罪

僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ樣世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れらるゝの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかこうか食ふ位の才はあるなりどうかこうか食ふの才を賴んで此浮世にあるは說明すべからざる一道の愛氣隱々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に增加するの見込あり此增加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ之を撞着と評されては仕方なく候

最後の一段は少々激し過ぎたる由貴意の如くかも知れず（僕の愚を憐んで可なり）抔と出られては眞に慚愧不禁再び叩頭謝罪

道德は感情なりとは御同意に候絶大の見識も其根本を煎じ詰れば感情に外ならず形而下の記號にて證明し難ければなり去れど此理想の標準に照し合せて見る過程（プロセス）が智の作用と存候

君の道德論に就て別に異議を唱ふる能はず唯貴說の如く惡を嫉むの一點にて君と僕の間に少しく程度の異なる所あるのみどう考へても君の惡を嫉む事は餘り酷過ぎると存候

微意の講釋は他日拜聽仕るべく候

君の言を借りて

（偏へに前書及び本書の無禮なるを謝す　不宣）

又々行脚の由不相變御清興賀し奉候

秋ちらほら野菊にのこる枯野かなの一句千金の價あり

畧丸の句は好まず、笠の句もさのみ面白からず

十一月十日夜　　平凸凹亂筆

子規

臥禪傍

明治二十五年

一

六月十九日　ホ便　牛込區喜久井町一番地より

下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ　（二一）〔はがき〕

十九日早朝

凸凹（原）昨君の青白の容を拜むに何ぞ累々として喪家の犬に似たるや就ては九時頃ブッセの試驗問題到着皆哲學の試驗を濟セ了んぬ處が君の平生點があれだから困る譯だけれど昨日の樣な條件のある試驗だから後から受る事も出來るだらう故都合次第左樣談判可相成候先は用事まで早々頓首

二

七月十九日　ト便　岡山市内山下町百三十八番邸片岡方より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ　（二二）

貴地十七日發の書狀正に落手拜誦仕候先は炎暑の候御淸適奉賀候小子來岡以來愈壯健日々見物と飮食と晝寐とに忙がはしく取紛れ打ち暮し居候去る十六日當地より金田と申す田舍へ參り二泊の上今朝歸岡仕候閑谷黌へは未だ參らず後樂園天守閣等は諸所見物仕候當家は旭川に臨み前に三[原]櫂山を控へ東南に京橋を望み夜に入れば河原の掛茶屋無數の紅燈を點じ納涼の小舟三々五々橋下を往來し燭光淸流に徹して宛然たる小不夜城なり君と同遊せざりしは返す〳〵[原]殘念なり今一度閑谷見物かた〴〵御來岡ありては如何一向平氣にて遠慮なき家なり試驗の成蹟面黑き結果と相成候由鳥に化して跡を晦ますには好都合なれども文學士の稱號を頂戴するには不都合千萬なり君の事だから今二年辛抱し玉へと云はゞなに鳥になるのが勝手だと云ふかも知れぬが先づ小子の考へにてはつまらなくても何でも卒業するが上分別と存候願くば今一思案あらまほしう

鳴くならば滿月になけほとゝぎす

餘は後便にゆづる亂筆御免

十九日午後

平凸凹より

獺祭詞兄

尊下

三

八月四日　ハ便　岡山市內山下町百三十八番邸片岡方より

松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ　（二三）

朶雲拜誦仕候御申越の如く當地の水害は前代未聞の由にて此前代未聞の洪水を東京より見物に來たと思へば大に愉快なる事ながら退いて勘考すれば居席を安んぜず食飽に至らず隨分酸鼻の極に御座候御地は別段の水害もなき模樣先々結構の至に存候津山は餘程の損害と承る是空子の處は如何

小生去る二十三日以後の景況御報申し上んと存居候へども鳥に化して跡をかくすとありし故旅行中にもやと案じ別段書狀もさし上げず居候先便にも申し上候通り當家は旭水に臨む場所にて水害中々烈しく床上五尺程に及び二十三日夜は近傍へ立退終夜眠らずに明し二十五日より當地の金滿家にて光藤と云ふ人の離れ座敷に迎へ取られ候處同家にても老祖母大患にて厄介に相成も氣の毒故八日目に歸宅仕候歸寓して觀れば床は落ちて居る疊は濡れて居る壁は振い落してあるいやはや目も當てられぬ次第四斗樽の上へ三疊の疊を竝べ之を客間兼寐處となし戸棚の浮き出したるを[原]緋べ是を食堂となす屋中を步行する事峽中を行

くが如し一歩を誤てば椽〔緣〕の下に落つ　いやはや丸で古寺か妖怪屋敷と云ふも猶形容し難かり夫でも五日が一週間となるに從ひ此野蠻の境遇になれて左のみ苦とも思はず可笑しき者なゝ實は一時避難の爲め君の所へでも罷り出んと存居候ひしが旅行中で留守にでも遇つたら困ると思ひ今迄差し控へ居候斯る場合に當方に厄介に相成候も氣の毒故先日より歸京せんと致候處今少し落付く迄是非逗留の上緩々歸宅せよと强て抑留せられ候へども此方にては先方へ氣の毒先方では此方へ氣の毒氣の毒と氣の毒のはち合せ發矢面目玉をつぶすと云ふ譯御憫笑可被下候

夫故閑谷黌へも猶參らず然し近日當主人の案內にて金比羅へ參る都合故其節一寸都合よくば御立寄可申歸京は九月上旬と御約束申上置候へども右の次第故少々繰り上本月中旬か又は下旬頃に致し度と存候大兄の御見込は如何に御座候や若し御不都合無之ば御同伴仕り度と存候來る六七日頃太田達人より爲替送付致し吳候筈故夫より後なら何時でも歸京差支へなし

實に今回の水は驚いた樣な面白い樣な怖しい樣な苦しい樣な種々な原素を含み岡山の大洪水又平凸凹一生の大波瀾と云ふべし然し餘波が長くて今に乞食同樣の生活を爲すは少し閉口石關の堤防をせき留めるや否や小生肛門の土堤が破れて黃水汎濫には恐れ入る其に床下は一面の泥で其上に寐る事故餘程身體には害があるならんと愚考仕る許りで目下の處では當分此境界を免がるゝ事能はざらんとあきらめ居候

猶委細は御面會の節　頓首頓首

八月四日

平凸凹

子規さま

尊下

四

十一月二十日　ル便　牛込區喜久井町一番地より
下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ　（二四）　〔はがき〕

御一家御無事御着京之趣大慶奉存候早速參上可仕のところ御（惘然）の際御邪魔と存じ差控へ居候御老母さま幷びに御令妹へよろしく御鳳聲被下度候何れ其內拜趨萬々

五

十二月十五日　イ便　牛込區喜久井町一番地より
下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ　（二五）

貴書拜見目下愈寒氣に差し向ひ候ところ筆硯ます〳〵御清榮奉賀候小生不相變毎日々々通學仕居候間乍憚御休神被下度候偖運動一件御書狀にて始めて承知仕り少しく驚き申候然し學校よりは未だ何等の沙汰も無之辭職勸告書抔も未だ到着不仕御報に接する迄は頓とそんな處に御氣がつかれず平氣の平左に御座候過日學校使用のランプの蓋に「文集はサッパリ分らず」と書たるものあれど是は例の惡口かゝる事を氣にしては一日も敎師は務まらぬ譯と打捨をき候其後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無斷に室外に飛び出候生徒ありし故次の時間に大に譴責致候是は前の金曜の事其外別段異狀も無之今日迄打過居候元來小生受持時間は二時間のところ生徒の望みにて三時間と致し且つ先日前學年受持の生徒來り同級へも出席致し吳ずやと賴み候位故左程評判の惡しき方ではないと自惚仕居候處豈計らんやの譯で大兄の御手紙にて運動一件小生の耳朶に觸れ申候勿論小生は敎方下手の方なる上過半の生徒は力に餘る書物を揑ね返す次第なれば不滿足の生徒は澤山あらんと其邊は疾くより承知なれど是は一方より見ればあながち小生の咎にもあらず學校の制度なれば是非なしと勘辨仕居候去るにても小生の爲めに〔ナ〕此間運動抔致す程とは實に思ひも寄らずと存居候段隨分御目出度かりし無論生徒が生徒なれば辭職勸告を受てもあながち小生の名譽に關するとは思はねど學校の委托を受けながら生徒を滿足せしめ能はずと有ては責任の上又良心の上より云ふも心よからずと存候間此際斷然と出講を斷はる決心に御座候

（〔原〕巨燵から追ひ出れたる）は御免蒙りたし

病む人の巨燵離れて雪見かな

十二月十四日夜　〔封筒の裏に〕

金之助

子規さま

御報知の段ありがたく奉謝候坪內へは郵便にて委細申し遣はすべく候其文言中には證人として君の名を借る親友の一言なれば固より確實と見〔原〕認むると云へば突然辭職しても輕卒の誹りを免が〔る〕ゝ譯なればなり願くば證人として名前丈をかし給へ但し出處は命ぜず召〔原〕還の氣使ひも無用なり

明治二十六年

八月七日　東京帝國大學寄宿舍より
西谷虎二氏へ

一別以後如何御暮し被遊候や時下酷暑のみぎりには候へども筆硯益御清穆の事と奉欣羨候迂生事も不相變無異消光日々晝寐と食事に餘念なく勉强致居候へば乍憚御休神可被下候九洲地方の御旅行は最早相濟候や定めて優遊御逸興の儀と紅塵中より推察仕候去月中旬菊池米山兩人と兩三日間日光地方へ罷り越し少しは塵懷の洗濯仕り候心得の處當今は其反動にて何分にも炎暑に耐へがたく日々呻吟仕居候段吾ながら憫笑の至貧生の境界あはれ斯の次第御察し可被下候寄宿舍も當時は大不景氣にて惣勢十三四人に過ぎず至つて寂寥を覺え候當夏卒業の文學士賣口大に惡しく皆困却の體氣の毒に存候小生抔も如何成る事やら頓と不相分今日を今日とのみ未來の考へなく打暮し居候此分にては九月に御馳走の約束もあまり當にならず當にせずと御待ち可被下候先は右暑中御伺がひまで餘は拜眉の節萬々可申述候時節がらくれぐ〱も御道體御心づけ可被遊候　匆々頓首

八月七日　　　　　　　　金之助

虎　二　様
　　梧　前

拜借の椅子少々破損仕候故〔巻紙破れて一二字不明〕は不相用丁寧に保存致居候〔同前〕破損後なれば元の通りには〔同前〕相成甚だ失敬

明治二十七年

一

三月九日　東京帝國大學寄宿舍より
　山口縣山口高等中學校菊池謙二郎氏へ（一）

御手紙被下難有拜見仕候大兄御赴任後は大分の好景氣の模樣何しろ結構の事と奉賀候小生病氣は目下差したる事も無之日々平常の通起臥罷在候へば乍憚御安慮被下度候實は去る二月初め風邪にかゝり候處其後の經過よろしからずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕り候故從來の〇〇と〇〇と兩方へ轉んでも外れそうのなき小生故直ちに醫師の診察を受け候處只今の處にては心配する程の事はなく矢張り平生の如く勉學致してもよろしく只日々滋養物を食し身體の衞〔原〕養を怠らぬ樣にする事專一なりとて夫より檢痰を試み候處幸ひバチルレン抔は無之去れば肺病なりとするも極初期にて今の内に加攝生すれば全治可致との事に御座候小生身體上の自覺も至極爽快にて目下は毫も平日と異なる所無之候へども可成滋養物を食し運動を力め「ノ

ンキ」に消光致居候今暑中休暇には海水浴か温泉にて充分保養を加ふる積りに御座候尤も人間は此世に出づるよりして日々死出の用意を致す者なれば別に咯血して卽席に死んだとて驚く事もなけれど先づ二つとなき命故使へる丈使ふが德用と心得醫師の忠告を容れ精々攝生致居候

何となう死に來た世の惜まるゝ

小生始め醫師より肺病と聞きたる時は兼て覺悟は致居候へば今更の様に驚愕は不仕又死と云ふ事に就ても小生は至極冷淡の觀念を有し候へば咯血抔に心經(原)を痛むる事は無之りしも只家の後事抔を考へ過ぎて少は心配仕候然し一方にては一度び此病にかゝる以上は功名心も情慾も皆消え失せて恬淡寡慾の君子とならんかと少しは希望を抱き居候にも係らず身體は其後愈壯健に相成醫師も左程差當りての心配はなし抔申し聞け候に就ても性來の俗氣は依然不改舊觀實に自らもあきれ果候そこで君の漫興に次韵して蕪句一首

閑却花紅柳綠春
江樓何暇醉芳醇
猶憐病子多情意
獨倚禪牀夢美人

御一笑可被下候此頃は雨のふる日にも散歩致す位に御座候

春雨や柳の中を濡れて行く

大弓大流行にて小生も過日より加盟致候處的は矢の行く先と心得候へば何時でも仇矢は無之眞に名人と自ら誇り居候

大弓やひらり〳〵と梅の花
矢響の只聞ゆなり梅の中

先は御返しまで　匆々頓首

三月九日

金之助

菊池兄

机下

二

三月十二日　東京帝國大學寄宿舍より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　(二六)

其後は御無音に打過候目下は新聞事業にて定めし御多忙の事と存候過日は小生病氣につき色々御配慮被下難有奉謝候其後病勢次第に輕快に相成目下は平生に異なるところなく至て健全に感じ

居候へども服薬は矢張以前の通致し滋養物も可成食ひ居候固より死に出た浮世なれば命は別段惜しくもなけれど先づ懸替のなき者なれば使へる丈使ふが徳用と存じ精々養生は仕る覺悟に御座候へば先づ御安心可被下候小生も始め醫者より肺病と承り候節は少しは閉口仕候へども其後以前よりは一層丈夫の樣な心持が致し醫者も心配する事はなし抔申ものから俗慾再燃正に下界人の本性をあらはし候是丈が不都合に御座候へどもどうせ人間は慾のテンションで生て居る者と悟れば夫も左程苦にも相成不申先づ斯樣に慾がある上は當分命に別條は有之間敷かと存候當時は弓の稽古に朝夕餘念なく候

　　弦音にほたりと落る椿かな
　　弦音になれて來て鳴く小鳥かな
　　弦音の只聞ゆなり梅の中

御一笑可被下候
銀婚式は生憎の天氣小生は只池の端を散歩せるのみにて市内の景況を知らず

　　春雨や柳の下を濡れて行く

先日來尋常中學英語教授法方案取調べの爲め隨分多忙に有之候處本日漸く結了大に閑暇に相成候

　　春雨や寐ながら横に梅を見る

閑情御一掬先は近況のみ　匆々

十[原]月十二日　　　　　　　　　　金之助

子規子
　　梧下

三

五月三十一日　東京帝國大學寄宿舍より
山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ（三）

二十四番の花も無常迅速の喩に漏れず最早綠陰時節と相成候處益御清適奉賀候生義不相變寄宿に起臥仕居候病氣も何處へやら行方知れず相成候へども猶醫師の診察を受け豫防の爲め服薬も仕居候大兄目下如何御消光被遊候や些と近況御報知可被下候小生は其後毎日弓術を强勉致居候へども天性の不氣[原]用中々上達の見込無之去りながらこゝが辛防處と入らざる處に負惜みを出し朝夕兩度に百本位は毎日稽古致居候中らなくとも少しは面白く散歩抔は全く癈[原]止仕候小屋坂牧吉田長谷川齋藤西谷等皆々執心に候昨今は諸氏とも大分上達弓術部は殆んど文科の專有と相成候位其代り

特別に上手も無之只數でこなす積りに御座候過日より賄の後に柔道劒道の道場を開き有志の面々頻りに勉强致居候小生も少し擊劍でも始め度と存候へども餘り運動の過劇なると手頃の相手のなきに閉口致し差控へ居候斯様に運動は隨分出精致候へども肝心の研究の方は一向はかどり不申此學年はまんまと遊んで通り抜け候是も病氣の爲と自ら良心に對し辯護致居候兎角理窟は何とでもつけらるゝ者に御座候狩野氏も過日より出京兩三度面會仕候隨分多忙の様に見受け申候昨年は御存じの如く夏中寄宿に蟄居致居候故今年は休暇に相成次第何れにか高飛を仕る積りに御座候大兄暑中休暇中の御計畫は如何に御座候や多分御出京の上御歸省の事と存候折よくば其時拜顏を得度先は近況御伺ひ迄　早々頓首

五月三十一日　　金之助

菊池賢契

座下

四

九月四日　ト便　東京帝國大學寄宿舍より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（二七）

拜啓昨夜又々持て餘したる酒嚢飯袋を荷ひてのそ〳〵と歸京仕候小生の旅行を許して健羨々々と仰せらるゝ段情なき事に御座候元來小生の漂泊は此三四年來沸騰せる腦漿を冷却して尺寸の勉强心を振興せん爲のみに御座候去すれば風流韻事抔は愚か只落付かぬ尻に帆を擧げて歩ける丈歩く外他の能事無之願くば到る處に不平の塊まりを分配して成し崩しに心の穩かならざるを慰め度と存候へども何分其甲斐なく理性と感情の戰爭益劇しく恰も虛空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安身（原）立命到底無覺束候俊鶻一搏起てば將に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鐵鎖を斷ずるの斧なきを如何せん抔と愚癡をこぼし居候も必竟驀向に直前するの勇氣なくなり候爲と深く慚愧に不堪去月松島に遊んで瑞巖寺に詣でし時南天棒の一棒を喫して年來の累を一掃せんと存候へども生來の凡骨到底見性の器にあらずと其丈は斷念致し候故踵を回らして故鄉に歸るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り日夜鹹水に浸り妄りに手足を動かして落付かぬ心を制せんと企て居候折柄八朔二百十日の荒日と相成一面の青海原凄まじき光景を呈出致候是屈究と心の平かならぬ時は隨分亂暴を致す者にて直ちに狂瀾の中に沒して瞬時快哉を呼ぶ折宿屋の主人岸上より危ない〳〵と叫び候故不入驚人浪難得稱意魚と吟出したれど主人禪機なき奴と相見「え」問答も其丈にて方がつき申候右の有様故別段面白き事もなく只錢を使つた處が大兄よりは幅が利く丈にて其他の「コンデシヨン」は大兄の方遙かによろしくと

斷定仕候間御自身も左樣御承知可被下候俗界に在て勉强が出來ぬ由御嘆息御尤もには御座候へども學問の府たる大學院に在つて勉强すべき時間はありながら勉强の出來ぬは實心苦しき限に御座候此三四年來勉强といふほど勉强をした事なく常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見る程氣樂な者には無之候然し申譯の爲暇さへあれば終日机に向ふ處幾分か殊勝に御座候此度も讀もせぬ書籍を山ほど携帶致候段我ながら其意を了解するに苦しみ候只「シエレー」の詩集一卷は常にと「は」云はざれど時々あまり不快の時は繰り返し〳〵或部分を熟讀致し大に愉快を覺え候必竟小生此不平を散ぜん爲めではなけれど此不平の頂點に達せる折忽ち腦中の靈火炎上して一路通天の路を開き或る「プリシプル」(原)を直覺的に感得したる如き心地致し大に胸中落付候其砌り「シエレー」の詩を讀み候に其句々甚だ小生の考へと合し天外亦此同情の人あるかと大に愉快に存候故に御座候

小生近日中下宿致すやも計りがたく候其折は又御報知可申上候

先は右近況迄　早々不一

九月四日　　　　　金之助

正岡賢契

座下

五

十月十六日　ト便　小石川區表町七十三番地法藏院より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　〔二八〕〔はがき〕

塵界茫々毀譽の耳朶を撲に堪ず此に環堵の室を賃して蠕(原)袋を葬り了んぬ猶尼僧の隣房に語るあり少々與覺申候御閑の節是非御來遊を乞ふ

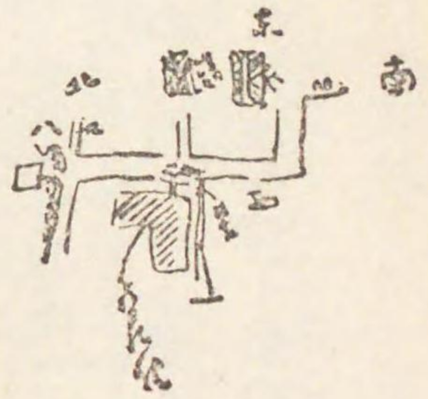
六

十一月一日　ニ便　小石川區表町七十三番地法藏院より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　〔二九〕

小生の住所は先　殿(原)通院の山門につき當り左りに折れて又つき當り今度は右に折れて半町程先の左側の長屋門のある御寺に御座候淨土宗の寺にて住持は易斷人相見抔に有名な人豐田立本といふ　圖にて示せば

大略右の如し午後は大抵閑居す必用なければ何處へも出ず隣房に尼數人あり少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり



尼寺に有髮の僧を尋ね來よ

三十一日

夏目金之助

正岡賢契
座右

明治二十八年

一

一月十日　ト便　小石川區表町七十三番地法藏院より
本郷區駒込千駄木町五十七番地齋藤阿具氏へ（一）

新年の御慶目出度申納候今度は○○○○○○○○○○○謹んで御祝ひ申上候小子去冬より鎌倉の楞伽窟に參禪の爲め歸源院と申す處に止宿致し旬日の間折脚鐺裏の粥にて飯袋を養ひ漸く一昨日下山の上歸京仕候五百生の野狐禪遂に本來の面目を撥出し來らず御憫笑可被下候先は右御祝ひまで餘は拜眉の上萬々

一月九日

夏目金之助拜

齋藤學兄

二

三月十八日　小石川區表町七十三番地法藏院より
山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ　(三)

拜呈仕候其後は打絶御無音奉謝候過日御招聘の件早速御返事可仕筈の處彼是不得其意荏苒今日に至り候段甚だ不調法御容赦可被下候偖小生儀今般愛媛縣尋常中學へ赴任の事と粗決定致し十中八九迄は相談も可纏と存候間貴校の方は乍失禮御斷り申上候右につき愈出發と定まり候上は彼是買調へ候品物も有之候處御存じの文なしにては如何とも致方なく因て甚だ御迷惑ながら貴方にて金五十圓程御融通被下間鋪候や尤も貴兄も隨分貧の字なるべければ（是は失敬）御手本[原]になきは承知なれどそこの所を友達の好みと思ひ何とか御算段相願はれ間じくや尤も返濟の義は赴任後兩三月中に屹度皆濟可致若し又赴任不致事と決定仕り候へばすぐに其儘御返却可致候右否や乍憚電報にて御報被下度（若し出來なければ外に奔走せねばならぬ故）先は用事のみ　早々頓首

三月十八日　　金之助

菊池契兄
　座右

三

五月二十八日　イ便　松山市一番町愛松亭より
神戸市神戸縣立病院內正岡常規氏へ　(三〇)

拜呈首尾よく大連灣より御歸國は奉賀候へども神戸縣立病院はちと寒心致候長途の遠征舊患を喚起致候譯にや心元なく存候小生當地着以來昏々俗流に打混じアッケラ閑として消光身體は別に變動も無之候教員生徒間の折惡[原]もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返す〳〵恐縮の至に御座候八時出の二時退出にて事務は大概御免蒙り居候へども少々煩鎖[原]なるには閉口致候僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候當地の人間隨分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿皆ノロマの癖に不親切なるが如し大兄の生國を惡く云ては濟まず失敬々々

道後へは當地に來てより三回入湯に來り[原]候小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地恨らくは猶俗物の厄介を受け居る事を當地にては先生然とせねばならぬ故衣服住居も八十圓の月俸に相當せねばならず小生如き丸裸には當分大閉口なり

貴君御親戚大原君より中學校員太田先生を以て不都合の事あらば何角世話をしてやらんと申し

込れたり所が小生例の放任主義で未だ參堂面謁の場合にも至らず御序の節はよろしく御傳聲被下度候

古白氏自殺のよし當地に風聞を聞き驚入候隨分事情のある事と存候へども惜しき極に候

當地着後直ちに貴君へ書面差上候處最早清國御出發の後にて詮方なく御保養の途次一寸御歸國は出來悪く候や

小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎ度候

近作數首拙劣ながら御目に懸候

快刀切斷兩頭蛇　不顧人間笑語譁
黃土千秋埋得失　蒼天萬古照賢邪
微風易碎水中月　片雨難留枝上花
大醉醒來寒徹骨　餘生養得在山家

辜負東風出故關　鳥啼花謝幾時還
離愁似夢迢々淡　幽思與雲澹々閑
才子群中只守拙　小人園裏獨持頑
寸心空托一杯酒　劍氣如霜照醉顏

二頃桑田何日耕　青袍敝盡出京城
稜々逸氣輕天道　漠々癡心負世情
弄筆慵求才子譽　作詩空博冶郎名
人間五十今過半　愧爲讀書誤一生

駑才恰好臥山隈　夙托功名投火灰
心似鐵牛鞭不動　憂如梅雨去還來
青天獨解詩人憤　白眼空招俗士咍
日暮蚊軍將滿室　起揮紈扇對崔嵬

御一噱可被下候

當地出生軍人の娘を貰はんか〱と勸むるものあり貰はんか貰ふまいかと思案せしが少々血統上思はしからぬ事ありて御免蒙れり

先は右近況御報知まで餘は後便に讓り申候

五月二十六日　　　夏目金之助

正岡賢兄
　　研北

四

五月三十日　ホ便　松山市一番町愛松亭より
神戸市神戸縣立病院内正岡常規氏へ　（三一）〔はがき〕

破碎空中百尺樓巨濤却向月宮流大魚無語沒波底俊鶻將飛立岸頭劍上風鳴多殺氣枕邊雨滴鎖閑愁
一任文字買奇禍笑指青山入豫洲
追加一律　斧正を乞ふ

五

七月二十六日　ロ便　松山市二番町八番戶上野方より
本鄉區駒込千駄木町五十七番地齋藤阿具氏へ　（三）

其後は手前こそ存外の御無音奉多謝候時下炎署に向ひ候處愈御淸適奉賀候小生亦幸ひに虎列拉

にも赤痢にも罹らず惜くもなき壽命をぶら〳〵消光致居候大兄研究の御目的を以て崎陽地方へ御出張到る處大もての由結構此事に御座候小生抔田舍にくすぼり歸[原]り居候のみにて一向さへ[原]たる事も無之當節は餘程田舍じみ申候當夏は出來るならば九洲[原]の山河を跋涉致度と存候へども囊中自ら錢なくといふ景況にて奈何とも致し難く候去年以來海水浴場溫泉場抔は嫌ひに相成候故金はなくとも其方の慾望は無之別段苦にもならず候

當中學は存外美少年の寡なき處其代り美人があるかと思ふと矢張り拂底に御座候何しろ學校も平穩にて生徒も大人なしく授業を受け居候小兒は惡口を言ひ惡戲をしても可愛らしきものに御座候

小生當地に參り候目的は金をためて洋行の旅費を作る所存に有之候處夫所ではなく月給は十五日位にてなくなり申候

近頃女房が貰ひ度相成候故田舍ものを一匹生擒る積りに御座候此度山口高等學校より招聘を受け候へども當地の人間に對し左樣の不親切は出來惡く候へば一先辭退仕候一生の間遭逢百端此先は何うなる事やら覿じ來れば不覺嗒然運は天にありと申候へども小生天公と中[原]がわるく御座候へば別に牡丹餅の棚より墜るを望み居り不申行盡天涯似斷蓬とか末は放翁の生れ代にでも相成る事と存候呵々

先日立花より來狀小生の二代目となるまで時々は厭世觀を生ずる由氣の毒の至り小生の二代目

が交友間に出來ては大騷ぎに御座候ものにならぬ前御消しとめ被下度候

先は近況御報道まで餘は後便にて萬々　早々頓首

七月二十五日　〔封筒の裏に〕　夏目金之助拜

齋藤學兄

座右

東京諸友へよろしく願上候

ゆく水の朝な夕なに忙がしき

六

八月二十七日　松山市二番町八番戸上野方より

松山市湊町四丁目十九番戸大原氏方正岡常規氏へ　〔三二〕

拜呈今朝鼠骨子來訪貴兄既に拙宅へ御移轉の事と心得御目にかゝり度由申居候間御不都合なくば是より直に御出であり度候尤も荷物抔御取纏め方に時間とり候はゞ後より迄るとして身體丈御出向如何に御座候や先は用事まで　早々頓首

八月二十七日　漱石

子規俳仙

研北

七

十月八日　松山市二番町八番戸上野方より

岡山縣津山尋常中學校菊池謙二郎氏へ　〔四〕

其後は存外御無音奉謝候時下秋冷のみぎり益御清適奉賀候先般は御地へ御就職に相成候よし新聞紙上にても散見致し御手紙にても承知致候御校は新設の黌舍のよし定めて何角御多忙の事と存候其代り隨分今迄よりも面白き事も候はんと存候隨分御奮勵御盡力の程奉冀望候小子其後頗ろ頑健閑散に打暮し居候其代り世事とは日々疎濶に打過候段々田舍び申候結婚の事も漸く落着致候○○○のは母肺病にて沒し候由につき小生には不適當と存じやめ申候矢張東京より貰ふ事に致候菅長谷川は過日熊本へ赴任致候同氏等一身上の爲めには結構の事に御座候山口は其後當參事官宛にて再び申し來候故同樣辭退致し候處今度は岡田氏より折を見て呼ぶ積り故其心にて居てくれと申

來候無論往先の事などは當には致さず風船玉主義に御座候呵々先は右近況御伺ひ迄如斯に御座候

草々頓首

十月八日　金

菊池盟兄　座右

八

十一月七日　イ便　松山市二番町八番戸上野方より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（三三）

遂に東京へ御歸りのよし大慶の至に存候僂痲も差したる事ならざるよし隨分御氣をつけ可被成候

小生去る二日觀瀑の爲め河の内へ參り近藤氏へ一宿翌日雨中簑と笠にて白猪唐岬に瀑一覽致候近藤宅にて觀瀑の書畫帖一覽中に貴兄の發句及び歌あり發句も書も頗る拙の樣に思はれ候僕此書畫帖を看て貴兄の處に至り不覺破顏微笑す番頭傍にありて曰く其内には甚だ拙なるのも御座りますと僕叱して云ふ見苦しき故に笑へるにあらず知人あるが爲めなり

十二月には多分上京の事と存候此頃愛媛縣には少々愛想が盡き申候故どこかへ巣を替へんと存候今迄は隨分義理と思ひ辛防致し候へども只今では口さへあれば直ぐ動く積りに御座候貴君の生れ故鄉ながら餘り人氣のよき處では御座なく候

駄句不相變御叱正被下度候可成酷評がよし啓發する所もあらんと存候　以上

十一月六日夜　金之助

升様

九

十一月十四日　ロ便　松山市二番町八番戸上野方より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（三四）

御手紙拜見致候其後兩待兎角よろしからぬよし怪しからぬ事隨分御加養可被遊候小生四五日風氣にて矢張臥褥然し大した事なく結句氣樂に御座候俳壇の老將御手合せのよし定め「て」佳句如山湧出致候事と存候霽月抔も矢張東京にぶら付居候にや今冬上京の節は仰せなくとも押しかけて

見參仕る覺悟に候へども昨今の力量にては甚だ心元なく存候三々九度の方はやめにするかも知れず如何となれば先づ金の金主から探さねばならぬからな仰せの如く鐵管事件は大に愉快に御座候小生近頃の出來事の內尤もありがたきは王妃の殺害と濱茂の拘引に御座候俳句精細の御評難有奉謝候折ふし碌堂參り合せて大に喜悅致し候人の惡口をうれしがるとは隨分性のわるき男なり小生の寫實に拙なるは入門の日の淺きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候拙句又又御送致候故先便の如く御存分に御成敗可被下候　以上

十一月十三日

愚陀拜

兩　待　樣

御枕元

一〇

十二月十五日　ハ便　松山市二番町八番戶上野方より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　(三五)

兩三日來當地は雪と霰のみ降り非常の寒氣大に恐縮致候東京は如何に御座候や大兄御變りもなく漸次御快氣に御座候や僑東上の時期も漸々近づき一日も早く俳會に出席せんと心待ち居候先日差上候駄句中には句にならぬもの多く大に赤面致居候今度の分も同じく不出來に候へども御序の節御斧正被下度候小生二十五日頃當地出發の筈に有之候へば拙稿同日位迄に當地へ着致さず候はば御手元へ御留置被下度候

承はり候へば日本は又々停止の厄にかゝり候由十一日より右災難にかゝり候やに承はり候左すれば十日の分は當地へ參る間敷若し御手元に御座候はゞ三ページ丈でもよし御郵送被下度候帝國文學で似角先生の惡口をいひしは醒雪と申す人にや喧嘩も惡口のやりとりと成つては下落致候

先は當用まで　匆々頓首

十二月十四日

金

升　樣

御もと

一一

十二月十八日　ホ便　松山市二番町八番戶上野方より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（三六）

遠路わざ〳〵拙宅まで御出被下候よし恐縮の至に存候其節何か愚兄より御話し申上候由にて種種御配意ありがたく存候小生は教育上性質上家内のものと氣風の合はぬは昔しよりの事にて小兒の時分より「ドメスチック　ハッピチス」抔いふ言は度外に付し居候へば今更ほしくも無之候近頃一段と隔意を生じ候事も甚だ不本意に存居候然し之が爲め御配慮を受けんとは期し居らず候ひしなり愚兄の申す處も幾分の理窟も可有之上京の節緩々可伺候結婚の事抔は上京の上實地に處理致す積りに御座候かゝる事迄に貴意を煩はす必要も無之かと存候尤も家内のもの確と致候もの少なき故此度の縁談につきても至急を要する場合には貴兄に談合せよとは兼て申しやり置候中根の事に付ては寫眞で取極候事故當人に逢た上で若し別人なら破談する迄の事とは兼てよりの決心是は至當の事と存候

小生家族と折合あしき爲外に欲しき女があるのに夫が貰へぬ故夫ですねて居る抔と勘違をされては甚だ困る今迄も小生の沈默し居たる爲め友人抔に誤解された事も多からんと思ふ家族につかはしたる手紙にも少々存意あつて心になき事迄も書た事あり今となつては少々困却して居るなり是非雲煙の如し善惡亦一時只守拙持頑で通すのみに御座候此頃は人に惡口されると却て愉快に相成候呵々

切角送つた發句の草稿をなくしては困るではありませんか舊稿を再錄して上るから序の時に直して下さい

過去日虛子に手紙を送る返事來る小生の發句を褒めてくれたり有難いやら恥しいやら恐縮の至やら

漸々寒氣相增候龍魔隨分御氣を付可被遊候

出京の宿も御心配ありがたし一先づ歸宅時宜によつたら御厄介になるかも知れず

小生の事につき愚兄がどんな事を申し候やは出京の上で篤と伺ひ可申候へども大兄の御考へで小生が惡いと思ふ事あらば遠慮なく指摘して吳玉へ是交友の道なり諷刺嘲罵は小生の尤癪にさはる處短〔原〕刀直入の說法なら喜んで受納可致候

先は御返事まで　草々頓首

十二月十八日

金

升　様

明治二十九年

一

一月十二日　ホ便　松山市二番町八番戸上野方より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（三七）［はがき］

一月十二日

海苔ひね|になつたる由御氣の毒に存候送別の詩拜誦後聯尤も生に適切乍粗末次韻却呈

海南千里遠　欲別暮天寒　鐵笛吹紅雪　火輪沸紫瀾
爲君憂國易　作客到家難　三十巽還坎　功名夢半殘

東風や吹く待つとし聞かば今歸り來ん

二

一月十七日 〔二便〕 松山市二番町八番戸上野方より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ (三八)

其後御病勢如何可成書狀を見合せられたし小生依例如例日々東京へ歸りたくなるのみ歸途米山より陶淵明全集を得て目下誦讀中甚だ愉快なり練鄕を神戶に訪ひ築島寺及び和田岬を見る其後俳會の模樣如何過日霽月來る半夜過ぎまで話して歸る

歸松後何となく倉忙俳句を作るの閑を得ず偶得る處亦皆拙惡なり然しながら習慣をかくと退步の憂あり故に送る面倒ながら御批政可被下候餘は後便に讓り申候　拜具

十六日　金

升　樣

三

四月十六日 〔へ便〕 熊本第五高等學校より

松山市千船町橫地石太郞氏へ (一)

拜啓出發の際は御見立被下ありがたく奉謝候小生去る十日發十三日午後當地に着致候當時非常の多忙(原)永き事を書き居る暇なし願くは舊同僚諸君へよろしく御傳へ被下度候(別に手紙も出さず)

英語教師五十五圓位にて一人あり農學士渡邊勇太郞とかいふ人なり滋賀縣尋常中學にありて後長崎の耶蘇學校に入る今は喧嘩してやめて居る由佐久間の話しでは出來る由一寸御報知申上候

四月十五日　金之助

橫地樣

四

五月三日 熊本第五高等學校より

坪內雄藏氏へ

拜呈其後は意外の御無音平に御海恕可被下候先生愈御淸穆奉恭賀候次小生不相變碌々現今は當地高等學校に奉職致居候間乍失禮御休神可被下候偖今般小生友人高濱淸なるもの先生の御宅に參上の上英文學に關する御高說伺ひ度由申居候間專門校以來の御交誼に對し同人紹介狀認めつかはし候間參上の節は何卒よろしく御敎訓被下度先は右用事のみ早々如此に御座候　頓首

五月三日

夏目金之助

坪内先生

虎皮下

五

五月三日 熊本第五高等學校より
麹町區飯田町四丁目狩野亨吉氏へ

拜呈

其後は打絶御無音に打過候段御海恕可被下候偖小生去月以來當地高等學校に轉任奉職致居候間左樣御承知可被下候偖今般小生友人高濱清なるもの小生朋友に紹介を求め訪問の上談話拜聞くべき人を敎へ吳れよと申來り候間早速貴君の處へ宛差出候間可然御高説御聞かせ被下度願上候此高濱なるものは文學的才に富みたる男にて現に俳句杯は中々上手に御座候且人物も隨分たのもしき男に御座候今般大學撰科へ入學志願致す筈にて勉强致居候へば何卒御遠慮なく種々御指導御交際被下度候先は用事のみ　早々頓首

五月三日

夏目金之助

狩野學兄

座右

東京諸友へ御面會の節はよろしく御傳聲可被下候

六

五月十六日 ハ便　熊本第五高等學校より
愛媛縣松山尋常中學校横地石太郎氏へ　(二)

拜啓　偖其後學校の有樣は如何に御座候や頓と消息なき故心懸りに候へども小生も色々多忙にて遂に伺ひもせず打過居候處今般去る友人の元より今年の英文科の卒業生にて田村喜作と申す人小生の後任として松山へ參り度由につき多少目下の事情報知致しくれと申し來候然るに此田村喜作と申す人は小生よくは知らぬ故犬[原]丈夫と引き受候譯には行かねど何にせ英文科の卒業生故別段不都合も有之間鋪かと存候若し後任者未だ定ま「ら」ぬならば同人の學力人物等御詮儀[原]相成候ては如何に御座候や右至急伺ひ上候

當地非常に家屋拂底にて漸くの事一週間程前敗屋を借り受候へども何分住み切れぬ故又々移轉

仕る覺悟に御座候
淺田は岩手へ參り候よし
目下學校の有樣は如何に御座候や　頓首

五月忘日　　金之助

横地樣

乍筆〔一字不明〕御令閨へよろしく御傳聲被下度候

七

六月八日　ハ便　熊本市光琳寺町より　下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（三九）

御紙面拜誦仕候虛子の事にて御心配の趣御尤に存候先日虛子よりも大兄との談判の模樣相報じ來り申候虛子云ふ敢て逃るゝにあらず一年間退て勉强の上入學する積りなりと一年間にどう變化するや計りがたけれど勉强の上入學せば夫でよからん色々の事情もあるべけれど先づ堪忍して今迄の如く御交際あり度と希望す小生の身分は固何時免職になるか辭職するか分らねど出來る丈は虛子の爲にせんとて約束したる事なり當人も夫を承知で奮發して見樣といひ放ちたるなり雙方共別段の事故新たに出來ざる內は其積りで居らねばならぬと存候小生が餘慶〔原〕な事ながら虛子にかゝる事を申し出たるは虛子が前途の爲なるは無論なれど同人の人物が大に松山的ならぬ淡泊なる處、のんきなる處、氣のきかぬ處、無〔原〕氣樣なる點に有之候大兄の觀察點は如何なるか知らねど先づ普通の人間よりは好き方なるべく左すれ〔ば〕左程愛想づかしをなさるゝにも及ぶまじきか或は大兄今迄虛子に對して分外の事を望みて成らざるが爲め失望の反動現今は虛子實際の位地より九層の底に落ちたる如く思ひはせぬや何にせよ今度の事に就き別に御介意なく虛子と御交誼あり度小生の至望に候小生よりも虛子へは色々申し遣はすべく候

妻呼迎の件色々御心配被下ありがたく存候實は先便申上候通父同道にて兩三日中に當地へ下向の筈に御座候間御休神被下度候當夏は東京へ參り度候へども妻の事件で如何なるやら分らず

近頃は一月頃より身體の御具合あしき由精々御保養可然名譽齷齪世事頓着深く御禁じ可被成虛子の事抔はどうでも御抛擲なさいよ　頓首

六月六日〔封筒の裏に〕　　愚陀佛

子規様

八

六月十一日 二便　熊本市光琳寺町より　下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（四〇）

中根事去る八日着昨九日結婚略式執行致候近頃俳況如何に御座候や小生は頓と振はず當夏は東京に行きたけれど未だ判然せず俳書少々當地にて堀り出す積りにて參り候處案外にて何もなく失望致候右は御披露まで餘は後便に讓る　頓首

衣更へて京より嫁を貰ひけり　　愚陀佛

子規様

九

七月二十八日　熊本市光琳寺町より　在獨乙大塚保治氏へ（一）

御存じの如く當地は只今土曜（原）中にて非常の暑氣毎日々々弱り果居候處大兄の御近況如何に御座候や先日は獨乙着の御手紙正に拜受仕候愈御清適御勉學の御模樣結構の事に存候國家の爲め御奮勵有之度切に希望仕候次に小生當四月より當地高等學校に轉任矢張り英語の教授に其日〳〵をくらし居候不相變御無事に御目出度のんきに御座候當地は管法師抔も有之大に都合よく御座候へども暑氣のはげしきには殆んど閉口致候丸で蒸風呂に入りたらんが如く實に御苦腦（原）の程御覽に入れ度と存候獨身に候へば疾に避暑とか何とか名をつけて逐電可致筈の處當六月より兼て御吹聽申上置候女房附と相成申候へば御荷物携帶で處々をぶらつくも何となく厄介なるのみならず隨分入費倒れの物品に候へば釜中の苦を忍んでぐず〳〵致居候御笑ひ被下度候小生は東京を出てより松山松山より熊本と漸々西の方へ左遷致す樣な事に被存候へば向後は琉球か臺灣へでも參る事かと我ながら可笑しく存居候爲朝か鄭成功の樣な豪傑になれば夫でも結構と思ひ候へども愈土蕃と落魄しては少々寒心仕る次第に御座候

過日御出立後玉影一葉東京御本宅より御郵送被下ありがたく奉拜謝候

或は御承知とは存候へども過日三陸地方へ大海嘯が推し寄せ夫は〳〵大騷動山の裾へ蒸氣船が上つて來る高い木の枝に海藻がかゝる抔いふ始末の上人畜の死傷抔は無數と申す位實に恐れ入り由忠助さん抔と洒落る場合でないから義捐金徵集の廻狀がくるや否や月俸百分の三を差出して微

衷をあらはしたと云ふ次第に御座候然し是は職員全體共に出金致したる事故別段小生の名譽にもなるまじきかと心痛致居候

偖御地にて面白き事も有之候はゞ御閑暇の時でよろしいから御一報可被下候京都大學は愈設立のよしにて過日來續々官費留學生派遣に相成候東京の諸友は不相變の樣子に御座候先は右左右御伺ひの爲め草々如斯に御座候　頓首

七月二十八日

熊本市光琳寺町

夏目金之助

金之助

大塚學兄

座右

右は小生の寄寓致居候宿所に御座候

一〇

九月二十六日　八便　熊本市合羽町二百三十七番地より

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（四一）

其後御月見も無事に打過候處世間は何となく海嘯以來騷々しきやに被存候東京は定めて目ざましき模樣ならんと存候大兄御病氣過日來少々よろしからぬやに承はり候只今の處如何に候や隨分御養生專一に御座候小生當夏は一週間程九洲[原]地方瀛[原]車旅行仕候俳句も近頃は頓と浮び申さず困却致候夫にも闕らぬ[原]小生の駄句時々雜誌抔に出るよし生徒抔の注進にて承知致候少々赤面の至と存じ何か傑作をものせんと思ひ立つ事有之候へども思ひ立つのみにして毫ものにはならない事が不思議に御座候大兄近頃は文筆の方は餘程御勉强の模樣雜誌の廣告にて承知仕候新體詩會抔[原]にも御發起のよし結構に存候時に竹の里人と申すは大兄の事なるや序ながら伺ひ上候虛子修竹大坂[原]にて滿月會に出席致候よし露石より申し來り候ちと御閑の節俳壇の樣子にても御報知被下度候俳書購求一件は大兄より虛子にでも御托し被下度候又同子に御面會の節活版の七部集及故人五百題一部づゝ乍面倒送る樣御依賴被下度候

序に附記す小生今回表面の處に移轉せり熊本の借家の拂底なるは意外なりかゝる處へ來て十三圓の家賃をとられんとは夢にも思はざりし「名月や十三圓の家に住む」かね轉居の事虛子にも御傳被下度候

月東君は今頃寐て居るか

九月二十五日

駄句少々御目にかけ候友人菅虎雄の句も同時に御批點被下度候

愚陀佛

子規様

一一

十二月五日 へ便　熊本市合羽町二百三十七番地より　神田區淡路町一丁目一番地高田屋方高濱清氏へ（二）

來熊以來は頗枯淡の生涯を送り居候道後の溫泉にて神仙體を草したる事宮島にて紅葉に宿したる事など皆過去の記念として今も愉快なる印象を腦裡に留め居候今日日本人三十一號を讀みて君が書牘體の一文を拜見致し甚だ感心致候立論も面白く行文は秀でゝ美しく見受申候此道に從つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし益御奮勵の程奉希望候先日世界の日本に出たる「音たてて春の潮の流れけり」と申す御句甚だ珍重に存候子規子がものしたる君の俳評一讀是亦面白く存候人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候樣に被存候然し大兄の御近什中には甚だ難澁にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之樣存候（心安き間柄失禮は御海恕可被下候）

所謂ぺ。く。づくし抔は小生の尤も耳障に存候處に御座候然し「吾に醉べく頭痛あり」又「豐年もトすべく新酒も釀すべく」抔は至極結構と存候凡て近來の俳句一般に上達巧者に相成候樣子に存候讀賣抔に時々出るのは不相變まづき樣覺候まづしと云へば小生先頃自身の舊作を檢査致し其まづきことに一驚を喫し候作りし當時は誰しも多少の己惚は免るべからざる事ながら小生の如きは全く俳道に未熟の致す處實に面目なき次第に候過日子規より俳書十數卷寄贈し來り候大抵は讀み盡し申候過日願上候七部集及び故人五百題（活字本）は御面倒ながら御序の節御送願上候子規子近來の模樣如何此方より手紙を出しても一向返事もよこさず多忙か病氣か無性か或は三者の合併かと存候小子僻地に罷在樂みとする處は東京俳友の消息「に」有之何卒爾後は時々景氣御報知被下度候近什少々御目にかけ候御ひまの節御正願上候小生藏書印を近刻致候是亦御覽に入候　頓首

十二月五日

漱石

虛子様

明治三十年

一

一月十二日　ト便　熊本市合羽町二百三十七番地より
松山市千船町横地石太郎氏へ　（三）

御書拜見仕候心經弘治版一葉御寄贈被下ありがたく拜受仕候又書籍の件拜承仕り候小生借用書籍は凡て十巻前後と存候右は全部とも中村氏に托し候山口氏が四冊は中村より受取り殘巻三巻は受取らずと申す事尤も不審に存候右は中村氏より返納せざりしか又は山口氏が手控を消す事を忘却せるかにては無之候や小生第壹回の談判を山口氏に始めたる時藏庫中を捜索し若し見當らずば中村へ今一度照會致し呉れとの主意に御座候處其後二月許り何の返事も無之貴書に先つ事一日始めて同氏より一書を受取候處書籍の有無及び書名も判然不致且つ中村より受取りたりとあるのみにて何巻丈受取何々の殘巻が不明なるや分らず雜誌とか何とか有之候へども如何なる種類の雜誌なるや小生勝間田寄附の書籍は正に借用致候是は「スコット」の小説三四部と記臆[原]致候へども右

は慥かに他の教科書用の書籍と共に中村に托し候に相違なく候雜誌の如き勝間田にせよ何にせよ借用したる覺無之候何卒今一應書籍の名を分明に致し書庫中を搜索し若しなければ中村へ今一應御照會被下候樣山口氏へ御命じ被下度候若し夫でも相分り不申候はゞ小生甘んじて辨償の責に任ずべくと存候

兎に角山口氏が所轄の書籍に對し小生轉任後數月の後まで其儘に致し置き始めて突然書生抔に對し小生が未だ書籍を返納致し居らぬ由口外致し候のみならず小生より照會致し候も二三月間何等の返事も致さゞる事第一學校へ對しては不親切なるのみならず小生へ對しても至當の處置と存じ不申候右御參考まで申上候

先は用事まで　早々頓首

一月十二日

金之助

横地學兄

座右

二

四月十八日　**八便**　**熊本市合羽町二百三十七番地より**

下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（四二）

腰部切開後の景況あまり面白からぬ由困つた事と存候過日は美事なる短册御寄送被下ありがたく奉謝候時々徒然の折は手習の爲めむだ書致し居候今春期休に久留米に至り高良山に登り夫より山越を致し發心と申す處の櫻を見物致候歸途久留米の古道具屋にて士朗と淡々の軸を手に入候につき御慰の爲め進呈致候勿論雙方とも眞僞判然せず且士朗の句月花を捨て見たれば松の風といふは過日差上候梅室の句と同じ樣に記臆[原]致し居候元來の駄句と存候に如何なれば色々の俳人の筆に登るにや是も僞物の一證かもしれずと存候然し疎畫は句よりも中々風韵ある樣見受申候淡々の方は畫は三文の價値も無之字は少々見處あり句に至つては矢張り駄の方と存候是も僞物かもしれず何せよ御笑草にまで御覽に入候先日來山川を當校に招聘致す事に相成目下拙宅に寄寓致居候小生東京のある學校にて招きを受け候處待遇も申分なけれど何分學校の義理あり且校長の依賴山川へ對しての信義抔の點より謝絕致す事と相成候虛子北堂の病氣はかゞ〵しからぬ由にて猶滯松のよし氣の毒の至と存候近頃小說を物せられたる由廣告で拜承嘘から出た眞と相成候にや呵々近業御覽に入候間御叱正願上候　不一

四月十六日

漱　石

子規樣

藥湯爐邊

三

四月二十三日（月）熊本市合羽町二百三十七番地より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（四三）〔封筒表側に「必親展」とあり〕

腫物猶々長大に生長厖然たる腰邊の大塊嘸かし御難儀と存候精々御自愛可然と存候

小生身分色々御配慮ありがたく奉謝候實は教師は近頃厭になり居候へどもさらば翻譯官はといふと果してやつて除るといふ程の自信と勇氣無之第一法律上の言語も知らぬ我々が外務の翻譯官と突然變化した處で英文の電報一つ滿足には書けまいと思ふなり尤も一二年見習の上は多少地のある事なれば何とか故（原）魔化しもきくべけれど差當りては到底高等官處か屬官の價値もあるまじと存候實は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候處外務の翻譯官に依賴し置きたり（多分小村なるべし）と申し越したり尊叔が課長なれば非常の好都合なれど自信なき事に周旋を賴み後に至り君及び加藤氏に迷惑がかゝりては氣の毒故其職掌事務等詳細の事相分り是ならば隨分君の面目を損する事なく遣つて行けるといふ見込がつく迄は先づ差し控た方可然と

愚考致候

仙臺の高中に目下行き度考なし仙臺は愚か東京の高等學校でも多分は辭する考なり否教師をして居る位なら當分現在の地位にて少し成蹟を現はしたる後にて動きたし過日高等商業學校長小山より中根を介して年俸千圓高等官六等にて來ぬかと申し來り中根も金の不足あるならば月々補助するから歸京せよとまで勸めたれど一方にては當地の校長は是非共居つて呉れねば困ると懇々の依賴なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出來る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ當分の處御校の爲に盡力すべしと明言したり且此語は校長のみならず山川を呼ぶ時にも明答に及びたる次第目下假令如何なるよき口ありとも自ら進んで求むるの意なく候尤も小生と當學校との關係變化する場合或は一身の事情にて斷然教育界を去る場合や或は官命にて是非なき場合は別問題にて自由に進退し得る境遇に御座候今回の翻譯官抔も教師の口で他へ轉ずる譯でないから小生に意思あり外務省で採用すれば當校を去る點に於ては別に苦情もある間鋪と思へども如何せん進んで願はれぬと申す譯は冒頭に申せし次第なれば是非なし

偖小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど實は當人自らが所謂わが身でわが身がわからない位故到底山川流に說明する譯には參り兼候へども單に希望を臚列するならば教師をやめて單に文學的の生活を送りたきなり換言すれば文學三昧にて消光したきなり月々五六十の收入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覺悟なれど遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むといふ譯にもゆかね

ば衣食丈は[原]小々堪忍辛防して何かの種を探し（但し教師を除ク）其餘暇を以て自由な書を讀み自由な事を言ひ自由な事を書かゝ[原]ん事を希望致候然るに小生は不具の人間なれば行政官事務官抔は到底して呉れる人もなくあつても二三月で愛想を盡かすにきまつて居れば大抵な口では間に合はず因て先頃郵便にて今回若し帝國圖書館とか何とかいふものが出來る樣子だから若し出來たらば其方へで「も」周旋して呉れまいかと中根へ申てやり候處圖書館の方は牧野に面會色々聞た處恰も松方内閣成立の始めでどうなるやら夢の樣な話しなりとの返答中根より到着致候まゝ其話しは今日迄夫ナリに御座候

右至急御返事まで草々如斯に御座候

序に伺候一葉集といふ俳書は前後兩編にて壹圓貳拾錢位ならば高くはなきや又芭蕉句解も八十錢位で相當の價なりや兩書共久留米で見當たれど高さう故買はなんだ安ければ今から取寄せる積りなり

尊叔には未だ拜顔を得ざれどよろしく御鳳聲願上候

二十三日　　　　　　金

升　様

四

五月二十八日　ハ便　熊本市合羽町二百三十七番地より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（四四）　〔封筒表側に「半用事」とあり〕

薰風の時節病魔果して如何近日蕪村の續稿を讀みて少しく輕快に向へるを知る伏して道體の安全を祈る小子因例如例碌々たり昏々たり詩腸枯れ硯池蕪す時に句あり沓句を成さず嘆息

行く春を剃り落したる眉靑し
行く春を沈香亭の牡丹哉
春の夜や局をさがる衣の音

憶子規

春雨の夜すがら物を思はする
埒もなく禪師肥たり更衣
よき人のわざとがましや更衣
更衣て弟の脛何ぞ太き
埋もれて若葉の中や水の音
影多き梧桐に据る床几かな

郭公茶の間へまかる通夜の人
蹴付たる雛の枕や子規
辻君に袖牽れけり子規
扛げ兼て妹が手細し鮓の石
小賢しき犬吠付や更衣
七筋を心利きたる鵜匠哉
漢方や柑子花さく門構
若葉して半簾の雨に臥したる
妾宅や牡丹に會す琴の弟子
世はいづれ椶櫚の花さへ穗に出でつ
立て懸て螢這ひけり草箒
若葉して緣切榎切られたる
でゞ蟲の角ふり立てゝ井戸の端
溜池に蛙鬪ふ卯月かな
虛無僧に犬吠えかゝる桐の花
筍や思ひがけなき垣根より

若竹や名も知らぬ人の墓の傍
若竹の夕に入て動きけり
鞭鳴す馬車の埃や麥の秋
渡らんとして谷に橋なし閑古鳥
折り添て文にも書かず杜若
八重にして芥子の赤きぞ恨みなる
傘さして後向なり杜若
蘭湯に浴すと書て詩人なり
すゝめたる鮓を皆迄參りたり
鮓桶の乾かで臭し蝸牛
生臭き鮓を食ふや佐野の人
粽食ふ夜瀛[原]車や膳所の小商人
蝙蝠や賊の酒呑む古館
不出來なる粽と申しおこすなる
五月雨や小袖をほどく酒のしみ
五月雨の壁落しけり枕元

五月雨や四つ手繕ふ舊士族
眼を病んで灯ともさぬ夜や五月雨
馬の蠅牛の蠅來る宿屋かな
逃すまじき蚤の行衞や子規
蚤を逸し赤き毛布に恨みあり
蚊にあけて口許りなり蟇の面
鳴きもせでぐさと刺す蚊や田原坂

熊本にて

夏來ぬと又長鋏を彈ずらく
藪近し椽[原]の下より筍が
寐苦しき門を夜すがら水鷄かな

成道寺

若葉して手のひらほどの山の寺
菜種打つ向ひ合せや夫婦同志
菊池路や麥を刈るなる舊四月
麥を刈るあとを頻りに燕かな

文與可や筍を食ひ竹を畫く
五月雨の弓張らんとすればくるひたる
立て見たり寐て見たり又酒を煮たり

〔封筒の裏に認めあるもの〕

水攻の城落ちんとす五月雨
大手より源氏寄せたり青嵐
水涸れて城將降る雲の峯

こんなものばかりに候然し病中の御慰に御覽[原]の入候
又別紙詩文稿は熊本人野々口勝太郎といふものゝ作にかゝる同人は往年商業學校の主計課を卒業し田舍新聞抔に從事し居たる處目下糊口の方に迷ひ頻りに小生方に泣き付に來るものなり當人の志願は文筆を以て月々夫婦の糊口位出來ればよしといふ也固より東京には限らねどひよつと日本〔新〕聞位にて使つて吳まいか又は他に心當りはなきか病中氣の毒ながら少々心配して見て吳ぬか願ひます　以上

五月二十八日

漱石

子規子

梧下

五

六月八日　ニ便　熊本市合羽町二百三十七番地より
仙臺市東一番町五番地加藤滿方齋藤阿具氏へ（三）

漸々暑氣相催し候處愈御清穆奉恭賀候小子幸ひに無異碌々消光仕居候間御休神可被下候兼て御依頼申上置候歴史講本御手數の御蔭にて漸く完備深く奉鳴謝候右草稿費金七拾錢はとくに御送付可申上筈に有之候處何角取紛れ荏苒今日に至候不惡御宥恕願上候今回幸便を以て右御郵送申上候間御落掌被下度願上候

仙臺へ御就任の事大慶の至に存候隨分國家の爲め學校の爲め御奮勵御指導の程奉希望候騷動後には却つてうまく行くものに御座候

米山の不幸返す〴〵氣の毒の至に存候文科の一英才を失ひ候事痛恨の極に御座候同人如きは文科大學あつてより文科大學閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候蟄龍未だ雲雨を起さずして逝く碌々の徒或は之を以て轅鮒に比せん殘念

小生只駑駘に鞭つて日暮道遠の嘆あり御憫笑可被下候先は右當用のみ　早々頓首

六月八日　　金之助

齋藤學兄
几下

六

八月一日　ト便　麴町區内幸町貴族院官舍中根氏方より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ（四五）

一筆啓上

毎度ながら長座嘸かし御迷惑の事と存候御備ひ被下候車夫濱田屋主人の希望により解雇主人自ら轅棒をとつて虎の門まで送り屆け候六十錢は小生前の車夫より沒收の上更に四拾錢を濱田屋の老翁につかはし候殘金貳拾錢何れ其内御返上可仕候兎に角昨夜御門前にての立まはりは一寸奇觀に候ひし御依頼の書籍其内御屆可申上候

御北堂樣御令妹へよろしく御傳聲可被下候　以上

夕涼し起ち得ぬ和子を喞つらく

八月一日　　　　　　　　　　愚陀佛

子規庵
　御もと

七

八月四日　ニ便　麹町區内幸町貴族院官舍中根氏方より
麹町區飯田河岸第五號成瀨方赤木通弘氏へ　（一）

拜啓其後御無沙汰に打過ぎ候大兄御任官の事委細熊本表校長宛にて手紙差出し候處未だ何等の廻答も無之實は校長も目下旅行中にて夫故返答の後るゝ事と存候就ては大兄履歴書は早晩學校にて入用の事と存候間御都合次第小生迄御送附被下度左すれば小生より直に校長手元へ差出し可成早く御任命の手續に致し度と存候先は用事のみ　早々頓首

八月四日　　　　　　　　　　金之助

赤木賢臺
　座下

八

八月十七日　ハ便　鎌倉材木座亂橋河内屋より
麹町區飯田河岸第五號成瀨方赤木通叺氏へ　（二）

拜啓暑氣烈しく候處愈御淸穆奉賀候過日英語御分擔の件につき御協議申上候處早速御承引被下奉謝候然る處本日熊本高等學校敎頭櫻井氏よりの書面にて來學年には從來の論理受持敎授黑木千尋氏やめる事に相成候に就ては該科擔當の儀貴君に願度由申來り候間左樣御承知可被下候尤も該科目は一週九時間につき過日御協議申上候英語の時間は多くとも十時間位に減少する筈に有之候尤も何年何組といふ事は時間割變更の上にて可申上と存候へども先は右至急得貴意候論理御擔任の事は兼ねての御希望と存じ候へば勿論御異存なき事と存じ候　頓首

八月十六日　　　　　　　　　　金之助

赤木賢臺
　梧下

九

九月十二日　ロ便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（四六）〔はがき〕

小生海陸無事昨十日午後到着致候途上秋雨にて困却す當地殘暑劇し
　今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる
小生宿所は表面の通

一〇

九月十九日　ハ便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎氏へ　（一）

其後は絶て御無音に打過申候漸々秋冷相催ふし候處愈御清福奉賀候御高吟乍毎度新聞紙上にて拜見致候先日御送の光風居七勝拙作とくに御笑覽に可入筈の處種々俗用の爲め今に不果素志實は何回かこゝろみ候へどもいつも果さずして已み申候發句も其後ほとんど中絶の姿東京ににて[原]三四回

子規庵に會合致し候のみに御座候今夏一月程鎌倉にくらし申候駄句二三首申譯の爲め御覽に入候
〔中斷〕
唱和の作秋季にては甚だ困難を感じ候然し其內御笑ひ草に何か物しまゐらすべく候　不一
　九月十九日　漱[原]石
霽月様
　研北

一一

十二月十二日　ニ便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（四七）

愈窮陰の時節と相成候御病體近日の模樣如何に候や不相變筆硯御繁昌の樣子故まづ御快氣の方と遙察致候小生碌々矢張因例如例に御座候俳句頓ともものにならず囊底と共に拂底に御座候頃日五言律一首を得候間御笑覽に供し候御大政願上候
　掉頭辭帝闕
　倚劍出城闉

岸律肥山盡
滂洋筑水新
秋風吹落日
大野絶行人
索寞乾坤黯
蒼冥哀雁頻

俳句少々御目にかけ候序を以て御批正願上候　以上

十二月十二日

金

升　様
　　几下

一二

十二月十七日　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
千葉縣千葉尋常中學校菊池謙二郎氏へ（五）

啓窮陰の時節と相成候處益御多祥奉恭賀候偖今夏東京表にて御面語[原]のみぎり一寸御評判有之候津山尋常中學の英語教授奥（泰二郎氏か）は其後矢張同校に奉職被致居候や實は本校にて來年四月頃迄には英語教師一名是非共雇入の運びに立ち至るべきかと存じ候につき只今よりそろ〳〵と候補者選定に着手致し猶進んでは内約丈にても取極めんとの下心も有之候に就ては同氏の性行學力其他大兄の御承知の箇條委細の處御報知を煩はし度同時に大兄若し同氏を以て高等學校英語教師に差し支へなしとの御見込に候へば同氏へも書狀御差出被下來[原]月四月頃迄には津山を去り得るや又第五高中に來り得るや一應御問ひ合せ被下間敷候や大兄の御紙面拜見の上又同氏の返答如何により猶進んで交涉致す必要も生じ候はゞ又々御手數を煩はすか或は直接の話し合ひに致し度と存候

猶可成丈多數の候補者を作り其中より選擇の自由を得度候につき奧氏へは其御含みにて只同氏の都合のみ御問ひ合せ願ひ上候成否は無論小生にも保證し難き儀に候へば左樣御承知願上候

又此事は候補者製造の上にて始めて校長へ打ち明る手順につき（卽ちあゐ無能力の敎師放逐を建議する積）德義上祕密を御守り被下度奧氏へも其旨御通知願上候右取急ぎ候まゝ當用のみ御免可被下候　頓首

十二月十七日

金之助

菊池賢臺
研北

奥氏待遇上の希望抔も序に御問合せ被下度候又同氏は檢定試驗合格者と記憶致し居候が如何それも御知らせを乞ふ

明治三十一年

一

一月六日 ト便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
府下日暮里村元金杉百三十七番地山岸方高濱清氏へ（二）

其後不本意ながら俳界に遠かり候結果として貴君へも存外の御無沙〔汰〕申譯なく候承はれば近頃御妻帯のよし何よりの吉報に接し候心地千秋萬歳の壽をなさんが爲め一句呈上致候

初鴉東の方を新枕

小生舊冬より肥後小天と申す温泉に入浴同所にて越年致候

かんてらや師走の宿に寐つかれず
酒を呼んで醉はず明けゝり今朝の春
甘からぬ屠蘇や旅なる醉心地

うき除夜を壁に向へば影法師

御大喪中とある故

此春を御慶もいはで雪多し

一年の計は元日にありと申せば隨分正月より御出精明治三十一年の文壇に虚子ある事を天下に御吹聽被下度希望の至に不堪候　以上

正月五日夜　漱石

虚子君

乍末筆御令閨へよろしく御鳳聲願上候

二

一月十八日　ロ便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
熊本縣玉名郡小天温泉前田氏へ

拜啓先日は兩人にてまかり出種々御厄介に相成御禮申上候今回は見事なる密（原）柑幷びに茸わざわざ御惠送にあづかり奉萬謝候先は右口上迄早々如斯に御座候也　頓首

正月十八日　夏目金之助
山川信次郎

前田様

三

三月二十一日　へ便　熊本縣飽託郡大江村四百一番地より
神田區東五軒町高濱淸氏へ　（三

其後は存外の御無沙汰平に御海恕可被下候御惠贈の新俳句一卷今日學校にて落手御厚意の段難有奉拜謝候小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候此分にてはやがて鳴雪老人の跡釜を引き受る事ならんと少々寒心の體に有之候子規子病氣は如何に御座候や其後是も久しく消息を絕し居候事とて頓と様子も分らず候へども近頃は歌壇にての大氣燄に候へば先々あしき方にてはなかるまじと安心致居候先は右御禮のみ早々如斯に御座候　頓首

三月二十一日

愚陀佛

虚子様

榻下

梅ちつてそゞろなつかしむ新俳句

四

六月十日 熊本第五高等學校教員室より
第五高等學校三部一年蒲生榮へ

一昨日は御來訪の處何の風情も無之候大兄の俳句千江氏の分と共に過日子規手許迄送り置候處本日着の日本に三句丈掲載致來候間供御一覽候猶斯道の爲め御奮勵の段偏に奉希望候　不一

六月十日

漱石

紫川様

研北

五

八月二十七日 土屋忠治へ（二）

芳墨拜見致候金策の件都合よく纏まり候よし大慶の至に存候此上とも知人の好意に背かぬ様御勉學専一と存候近頃東京より參り候ものゝ話しには大學の書生の品行日々頽廢遊里抔に出入致を名譽と致す位のよしかゝる中には餘程の決心必要に御座候水に入つて溺るゝか火に入つて熱くるか平生の得力は斯様の時にわかるものに候よく／＼御注意可被成候君平素禪を好むも禪は文句にあらず實地の修行なるべし塵勞の裡にあつて常に塵勞の爲に轉ぜらるゝならば禪なきと一般ならん小生不知禪妄りに相似を説く唯君の成功を冀ふが爲のみ　不一

八月二十七日

金之助

忠治様

六

九月四日 イ便　熊本市内坪井町七十八番地より

神田區錦町眼科醫院大西氏方菅虎雄氏へ（一）

其後は不相變御無沙汰に打過候過日來御上京のよし忽ち接華墨承知致候今度の御東上は御身邊の御關係のやうに承り候先日狩野氏より第一の方にて大兄を御招聘の相談纏まり候やの報有之多分それか爲めの御出發と存候此際結構の事と遙かに御祝申上候當校の方は過日黑本教授〔一字不明〕舍監兼務に任ぜられ候是は定めて新聞紙上にて御承知の事と存候山川狩野兩氏未だ歸熊の運びに至らす小生終日閑坐貴重の米粒を浪費致候俣野生過日東上中根岸邊に寓居のよし手紙を以て報じこし候參上の節は隨分御訓示願上候淺井氏には時々面會御噂致居候過日御來示の俳句數首日本新聞へ寄送致候處夏季〆切後にて掲載の運びに至らず其後三池生より禮狀到來始めて同人の句なるを知り申候近頃は頓と俳句も作り不申著中は少々奮發打坐を試み候處些の入處も無之其内運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放却致候御憫笑可被下候法語々錄の類數種披見致し候が少しの得に御座候へども畫餠不充饑依然たる噇酒糟の漢なるには閉口致候右御挨拶旁近況御報知迄　早々頓首

九月三日夜

金之助

虎雄様

研北

明治三十二年

一

四月二十日　土屋忠治へ（二）

啓御老母樣かねて御病氣の處御療養の甲斐もなく御遠逝のよし拜承嘸かし御痛悼の事と遙察致候此際金錢上の事にて必用の事も有之候はゞ些少の事は如何樣にも取計申候間無御遠慮御申越可相成右は先御弔詞迄早々如斯御座候　頓首

四月二十日

金之助

忠治樣

二

九月二日 ト便　熊本市内坪井町七十八番地より
牛込區肴町五十四番地夏目直矩氏へ（一）

尊書拜見仕候御手紙の趣拜讀致候右につき少々分り兼候儀有之候につき重ねて申上候

小生の伺ひ度は姉の意志竝びに高田の意志の確然たる處に有之候然るに御手紙にては雙方の意志とも只貴君の御推察のみにて此件につき小生のとるべき態度を決しかね候樣の御返答かと存候尤も姉は目下喘息のよし是は一週間位にて一應治る事と存候へば其節にてよろしく又高田の方は御會見の上何とか當人の口より確としたる處を御聽取被下度御迷惑とは存じ候へども最初此事件を相生じ候節より中間に御立ち被下候は御覺悟の事と存候そは大兄より始めて口を開いて此事件を喚び起され候故に候

右高田の意志（姉の方は目下至急にも無之）承はり候上にて篤と處置致度と存候

目下高田のなす處は啻に小生を馬鹿にするのみならず大兄をも馬鹿にしたる仕方には無之や己れの女房が人の世話になるのに一言の禮もせぬ樣なものはあまり多からぬ樣被存候若し理窟が分らずして平氣ならば御諭し被下度候わかつてゐてするのなら證言を御取り被下度小生にも其考有之候

右折返し御返事申上筈の處少々旅行致居候爲め遲引致候

月々のもの送る送らぬの點に關しては要領を得たる御返事頂戴致候上の事と可致從つて今回は御答申上ず候　頓首

九月二日　　　　金之助

直　矩　樣

愚女は筆となづけ申候

三

十二月十一日 二便　熊本市内坪井町七十八番地より
神田區猿樂町二十五番地高濱淸氏へ（四）

其後は大分御無沙汰御海恕可被下候時下窮陰之候筆硯愈御淸穆奉賀候偖先般來當熊本人常松迂巷なる人當市九洲〔原〕日々新聞と申すに紫溟吟社の俳句を連日掲載する樣盡力致し猶東京諸先俳の俳句も時々掲載致し度趣にて大兄へ向け一書呈上候處其後何等の御返事もなきよしにて小生より今一應願ひくれる樣申來候右迂巷と申す人は先般來突然知己に相成候人なるが非常に新派の俳句に熱心忠實なる人に有之實は今回の擧抔も新派勢力扶植の爲めの計畫に候左すればほとゝぎす發行

者などは大に聲援引き立てゝやる義理も有之べきかと存候且九洲地方は新派の勢力案外によはくほとんど俳句の何ものたるを解せざる有様に候へば俳句趣味の普及をはかる點より論ずるも幾分か大兄抔は鼓吹奬勵の責任ありと存候右の理由故何とか返事でも迂巷宛にて御差出可被下候又日日新聞は同人より大兄宛にて毎日御送致し居候よし定めて御閱覽の事と存候

乍序ほとゝぎすにつき一寸愚見申述候間御參考被下度候

「ほとゝぎす」が同人間の雜誌ならばいかに期日が後れても差支なけれど既に俳句雜誌抔と天下を相手に呼號する以上は主幹たる人は一日も發行期日を誤らざる事肝要かと存候それも一日や二日なら兎「に」角十日二十日後れるに至つては殆んど公等が氣に向いた時は發行しいやな時はよす慰み半分の雜誌としか受取れぬ次第に候尤是には色々な事情も可有之又御陳述の如く期日の後れたる爲め毎號改良の點も可有之とは存じ候へども門外漢より無遠慮に評し候へば頗る無責任なる雜誌としか思はれず候現今俳熱頗る高き故唯一の雜誌たる「ほとゝぎす」はかく無責任なるにも不關賣口よき次第なるべけれど若し有力な競爭者出でば之を壓倒する事固より難きにあらざるべし假令有力なる競爭者が出來得ざるにせよ敵なき故に怠る樣に見ゆるは猶更見苦しく存候

次に述べたきは「ほとゝぎす」中にはまゝ樂屋落の樣な事を書かれる事あり是も同人間の私の雜誌なら兎に角苟も天下を相手にする以上は二三東京の俳友以外には分らず隨つて興味なき事は削られては如何加之品格が下る樣な感じ致候高見如何虛子露月が俳人に重ぜらるゝは俳道に深きが爲め其秋風たると春風たるとに關係なきなり天下の人が虛子露月を知らんとするは句の上にあり「頰をかむ」の「顏をなめる」のと愚にもつかぬ事を聞いて何にかせんや方今は「ほとゝぎす」派全盛の時代也然し吾人の生涯中尤も謹愼すべきは全盛の時代に存す如何

子規は病んで床上にあり之に向つて理窟を述ぶべからず大兄と小生とはかゝる亂暴な言を申す親みは無き筈に候苦言を呈せんとして逡巡するもの三たび遂に決意して卑辭を左右に呈し候是も雜誌の爲めよかれかしと願ふ微意に外ならざれば不惡御推讀願上候　以上

十二月十一日

漱石

虛子樣

横顏の歌舞伎に似たる火鉢哉
炭團いけて雪隱詰の工夫哉
御家人の安火を抱くや後風土記
追分で引き剝がれたる寒かな

正

四

月日不詳　十二月頃　土屋忠治へ（三）

貴翰拜見致候銀行の件委細承知致候右は卒業後大分の社に入りて從事するといふ條件の如く聞え申候然らば其年限はどの位に候や
若し過重の義務と不當の束縛ありて忍び難き程ならば出來る丈他の方法を講ずる方可然か
小生目下の狀況にては月々五六圓の金は送る事出來るべし其上に山川狩野二氏に依賴して月々二圓宛もらへば十圓の金は手に入るべし假に中根に寄食するとせば其位にて行き立つやも知れず是も一策ならん

（狩野山川二氏共貧の方なれど君の學資に關して幾分か補助の意あるは在熊中明言されたる事あり若し此策をとるならば小生より懸合て見るべし）

〔以下卷紙切れて缺〕

兎も角も手紙にては巨細の事は述べ難し狩野山川菅三先生の意見など聞きたる上にて御分別あるべし

〔以下卷紙破れて缺〕

明治三十三年

一

四月五日　木便　熊本市北千反畑より
愛媛縣溫泉郡今出町村上半太郎氏へ（三）〔はがき〕

御書拜見近頃は發句廢業駄句もなにも皆無に候今般表面の處へ轉寓致候間一寸御傳申上候

鶯も柳も青き住居哉
菜の花の隣ありけり竹の垣

四月五日

二

九月六日　チ便　牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より

本郷區駒込西片町十番地イの十六號寺田寅彥へ 〔一〕〔はがき〕

小生出發は滊[原]船出發の時刻變更の爲め午前五時四十五分ノ滊車と相成べくと存候是も正確ならず御見送御無用に候

秋風の一人をふくや海の上

三

九月十日 汽船プロイセン號より

牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根重一氏へ 〔一〕

拜啓横濱解纜ノ際ハ罷[原]御見送被下難有存候初日ノ航海ハ氣分あしく晩餐ヲ食ハズ臥床致候乘合ハ英人ヤラ佛人ヤラニテ既ニ洋行シタル感有之神戸ニテ上陸諏訪山溫泉ニテ日本料理ヲ食ヒ日本ノ浴衣ヲ着タル爲メ漸ク歸朝致候樣ノ感ニ存候此先ハ漸々西洋クサクナル許ト存候神戸ノ時間クルヒタル爲メ鈴木君ニ面會ヲ得ズ行違ニテ甚だ殘念ニ存候今日午後五時頃ハ長崎へ到着ノ筈其時ハ又上陸散步デモスル積ニ候

船中ハ只少々窮窟ナルト風波アルノミニテ他ハ凡テ我々ノ生活ヨリハ遙ニ上等ニ候朝起キルト直グニ茶ヲ飮マセ八時頃ニ至リ朝飯ヲ出シ十二時ニ晝飯三時ニ茶ヲ出シ六時ニ晩餐九時頃又茶ト云フ譯デ都合一日ニ六回ノ御馳走ニ候米ツキデモ四度〔ニ〕候普通ノ我々ハ到底六回ヤルコトハ出來ニクヽ候

先ハ無事御報知迄　匆々頓首

九月十日午前十一時奏樂ヲ聞キナガラ

プロイセン喫烟室ニテ

金之助

中根樣

母上樣倫、梅、其他ノ人々ヘモヨロシク願上候

此手紙鏡ヘモ御示シ被下度候

〔裏に〕

湯淺、土屋、俣野ヘ宜敷願上候

留守中區役所其他ノ用事ハ湯淺カ土屋ヘ御依賴可被成候

金之助

鏡どの

四

九月十九日　清國香港より
麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ（五）〔はがき〕

航海は無事に此處まで參候へども下痢と船醉にて大閉口に候昨今は大に元氣恢復唐人と洋食と西洋の風呂と西洋の便所にて窮窟千萬一向面白からず早く茶漬と蕎麥が食度候〔中略〕熱くて閉口、二百十日には上海邊にて出逢申候

阿呆鳥熱き國にぞ參りたる
稻妻の碎けて青し海の上

〔『ほとゝぎす』第三卷第十二號より轉載〕

五

九月二十七日　汽船プロイセン號より
牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方夏目鏡へ（一）

今日ハ九月二十七日ニテ吾等ガ乘レル船ハ味爽英領「ペナン」ト申ス港ニ着キ申候未明ヨリノ小雨ニ加フルニ出帆時刻ハ午前九時ナレバ遺憾ナガラ上陸ヲ得ズ上海ニテハ日本旅館ニ宿泊シ香港ニテモ同朋（原）ノ營業ニ關ル宿屋ニテ日本飯ノ食納ヲナシ候上海モ香港モ宏大ニテ立派ナルコハ到底横濱神戸ノ比ニハ無之特に香港ノ夜景抔ハ滿山ニ夜光ノ寶石ヲ無數ニ縷（原）メタルガ如クニ候又「ピーク」トテ山ノ絶頂迄鐵道車ノ便ヲ假リテ六七十度ノ峻坂ヲ上リテ四方ヲ見渡セバ其景色ノ佳ナルコ實ニ愉快ニ候「シンガポア」ニモ上陸シ馬車ヲ假リテ植物園博物館及市街ヲ一見致候茲ニモ日本ノ旅館アリテ午食ヲ認メ候此地ノ日本人ノ多數ハ醜業婦ニテ印度ノ腰卷ニ綿チリメンノ羽織ニ一種特別ナ下駄抔ヲ穿キテ街上ヲ散歩致候一種奇的烈ノ感ヲ起サシメ候熱帶地方ノ植物ハ名前ノミヲ承知致候ガ來テ見レバ今更ノ如ク其青々ト繁茂セル樣ニ驚カレ候熱帶地方ト申セバ太陽直下ノ光線ニテ身體モ焦ゲル位ノ熱サト想像致候處實際ハ豈計ランヤデ却ツテ日本ノ夏ヨリモ涼シキ位ニ候但春夏秋冬ニ寒暖ノ區別ナキノミト御承知可被下候此邊ニテ見ル印度人ハ佛畫ニ見ル阿羅漢丸出シニテ其服裝顏色遥カニ日本人ヨリハ雅ニ御座候色ノ尤モ黒キハ紫檀位ニテ且其光澤ノ美ナルコモ殆ンド紫檀ニ彷彿タル者之アリ候「シンガポア」ニテハ碇泊中船ノ周圍ニ幾十艘ノ丸木舟ヲ漕ギ寄セテ口々ニ分ラヌコヲワメキ候樣面白ク候是ハ船客ヨリ銀貨銅貨ヲ海中ニ投ゲロト申ス譯ニテ甲板上ヨリ慰半分ニ投ゲル貨幣ヲ海中ニモグリテ取リテ上ガルニ百ニ一モ過タズ感心ナコニ候

皆御變リナキコト存候其許モ筆モ達者ト存候月々ノ俸給ハ固ヨリ些少ナレドモシ餘アラバ幾分

ニテモ家賃トシテ御納可被成候夏目ヘハ事情ヲ善ク申シ遣ハシ候間都合次第ニテヨロシク候
小生ノ着物羽織等ハ留守中ノ寸法ノ合フ樣縫直シ可被成候
其許ハ歯ヲ拔キテ入歯ヲナサルベク候只今ノ儘ニテハ餘リ見苦ク候
頭ノハゲルノモ毎々申通一種ノ病氣ニ違ナク候必ズ醫者ニ見テ御貰可被成候人ノ言フヿヲ善ヒ加減ニ聞テハイケマセン
食物ノ急ニ變化シタルト氣候アツキト運動不足ト船ノキラヒナトガ合併シテ消化機能兎角働キ方面白カラズ目ハ餘程クボミ申候其割ニ身體ハ左ノミヤセ不申候
此手紙ハコロンボト申ス處ニ着テヨリ出スベケレバ日本ニハ三週間位ノ後ニ達スベシト存候

金之助

鏡どの

六

十月八日 汽船プロイセン號より
牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ（二）

今日ハ十月八日ニテ横濱ヲ出發シテヨリ烏[原]渡一月目ナリ一週間許前ニコロンボト申ス處ニ碇泊

是ハセロンノ港ニテ「セロン」ハ釋迦ノ誕生地ナリ此地ニ來リテ見レバ李龍眠ノ佛畫ニアリソウナ印度人ノミ〔ニ〕テ頗ル雅ニ候
熱帶地方ノ植物ノ見事ナル事ハ今更ノ樣ニ驚かれ候「コーコ」「バナナ」抔ノ熟シタルヲ木ノ枝ニ見タルハ實ニ面白ク候佛敎ノ寺院ニ參詣致候是ハ海ヨリ三里許リ田舍に有之結構抔幼稚ニテ見るに足らず只古跡と申迄に候舍利塔は今も存在致居候
昨夜は名月にて波も風もなく十二時近く迄甲板に逍遙致候今日ハ「エーデン」と申す處に着スル筈に候是ヨリ紅海ニテ砂漠ノ熱キ風が吹く[原]來る中を通りて地中海に出る事に候兎角する內には英吉利に着可致思へば長き樣な短かきものに候
毎々ながら西洋食には厭々致候且海岸は小生の性に適せざる事とて横濱出帆以來眼が餘程くぼみ申候然し別段の病氣もなく先ゞ[原]無事なれば御安堵可被下候
熊本にて逢ひたる英國の老婦人「ノット」と申す人上等に乘込居りて一二度面會色々親切に致し吳候此人の世話にて「ケンブリッヂ」大學に關係の人に紹介狀を得候へば小生は多分「ケンブリッヂ」に可參かと存候
筆は其後丈夫に相成候や隨分御氣をつけ可被下候
留守中とて無暗に寐坊被成間敷候
中等船客は五十名以上有之非常に賑かに候小生は別に噺相手もなく默然として居候

髮は丸髷銀杏返抔に結ばざる方よろしく洗髮にして御置可被成候
西洋人ノ子供澤山居候奇麗にて清潔なる事は日本人の比に無之衣服も至極輕便にて羨敷存候
船中は毎日入浴も出來よごれ物の洗濯も出來御馳走も食へ下等下宿抔よりも遥かに上等の生活と存候然し寐[原]室の窮窟にて風通のあしきは閉口致候
印度洋は日本の夏よりも餘程涼しく候且風波も至極穩に候

雲の峯風なき海を渡りけり

御地にては漸々秋冷の候に可相成候へば隨分御身御厭なさるべく候
皆々へよろしく
時さんの呉れた萬年筆は船中にて鐵棒へツカマツて器械體操をなしたる爲め打ち壞し申候洵に申譯無之御序の節よろしく御傳可被下候

十月八日

金之助

鏡　ど　の

小生への書信其他は凡て在倫敦日本公使館宛にて御出可被成候

七

十月二十三日　佛蘭西巴里より
牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ（三）

紅海ノ熱ノ非常ナルニ引キ易ヘテ地中海ニ入レバ既ニ日本ト同ジ氣候ニ候 Naples ト申ス所ニ碇泊中上陸ノ上博物館等ヲ一見是ハ「ポンペイ」ヨリ堀出シタル種々ノ古物ヲ蒐集セル見事ノモノニ候夫ヨリ Genoa ニテ船ヲ棄テヽ上陸其地ニ一泊以太利ノ小都會ナルニモ關セズ頗ル立派ニテ日本抔ノ比ニアラズ殊ニ Naples ノ寺院等ノ内部ノ構造ハ來テ見子バ分リ兼候馬車ニテ見物致候が半分ハ見物サセニ歩行ク樣「ナ」モノニ候皆々奇體ナ奴ダト云ハヌ許リニ見返候「ゼノア」ヨリ瀛[原]車ニテ「パリス」ニ十月二十一日（昨朝）到着瀛車抔ノ雜沓混雜馴レヌ我々ハ「マゴマゴ」シテ途方ニ呉[原]レル許リナリ金ノ力ニ賴リテ夢中ニ「パリス」迄「タドリ」ツキ候が目付ものに候「パリス」ニ來テ見レバ其繁華ナルヿ是亦到底筆紙ノ及ブ所ニ無之就中道路家屋等ノ宏大ナルヿ馬車電氣鐵道地下鐵道等ノ綱ノ如クナル有樣寔ニ世界ノ大都に御座候昨日ハ停車場ニ荷物受取ノ爲メ參リ夫ヨリアル素人屋（宿屋ハ高クテ居ラレズ）ノ三階ヲ借リ一週間滯在ノ積ニ候食事ハ三度三度外ヘ出テ認メ候夫デモ一日ノ費用七八圓ヲ下ラズト存候今日ハ博覽會ヲ見物致候ガ大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一向方角サヘ分リ兼候名高キ「エフエル」塔ノ上ニ登リテ四方ヲ見渡シ申候是ハ

三百メートルノ高サニテ人間ヲ箱ニ入レテ綱條ニ「テ」ツルシ上ゲツルシ下ス仕掛ニ候博覽會ハ十日や十五日見(原)ニモ大勢ヲ知ルガ積(原)ノ山カト存候只今午後十二時迄「パリス」ノグロン ヴルヴハート申ス繁華ナ處ヲ散歩シテ地下鐵道ニテ歸宅致候斯樣ニシルシ候ト何モカモ自分デヤツタ樣ナレドモ「パリス」ニテハ文部ノ書記官渡邊董之助ト申ス人ノ世話デ歩行キ廻リ候「ゼノア」カラ「パリス」迄ハ全ク金ノカデ通リ候言語ノ通ゼヌ容子ノ分ラヌ所程不便ナモノハ無之歐洲上陸以來自動的ニ何モナシタルヿナク悉皆他動的ニ候惡者ガ田舍モノヲ瞞スノモ最(原)ト存候意外ノ失策ナク「パリス」迄參候が不思議ニ候此位ナラ謠ヲヤラズニ佛語ヲ勉强スレバ善カツタト今更不覺ヲ後悔致候是ヨリハ一人ニテ英京ニ渡ル事故ドウナルカ妙ナモノニ候當地ニ來テ觀レバ男女共色白ク服裝モ立派ニテ日本人ハ成程黄色ニ觀エ候女抔ハクダラヌ下女ノ如キ者デモ中々別嬪有之候小生如キアバタ面ハ一人モ無之候

其他大分書キタキ事有之候ヘドモ疲勞致候故擱筆後ハ英國ヨリ發信致候中根皆々樣ヘヨロシク其他ノ人ヘモヨロシク

當地ハ中々寒ク冬ノ外套ヲツケテ手袋ヲハメテ歩行キ候身體ハ別段ノ事モ無之候御安意可被下候其許懷妊中善々身體ヲ大事ニ可被成候筆モ隨分氣ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル樣ナ小說抔ハ御止メ可被成候可成ノンキに御暮シ可被成候

入齒ノ事御實行可被成候丸髷抔ニハ結ハヌガヨロシク候洗髮可然候

十月二十二(原)日午後(原)一時　金之助

鏡 ど の

小生洋服ハ東京ニテ作リ來リ好都合ニ候是ナラバ「ガラ」モ仕立モ別ニ恥カシキヿナク用ラレ候太キシマ「ハデ」ナ色ノモノナドハ着テ居ル者無之皆「クスン」ダ無地下(原)降類ニ候就中外套ハ大概黑カ紺ニ候茶ハ餘程少ナク鼠モ稀ニ見受候其他ハ一切無之候

歐洲ニ來テ金ガナケレバ一日モ居ル氣ニハナラズ候穢クテモ日本ガ氣樂デ宜敷候

八

十月三十日 76 Gower Street, London より

牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ (四)

拜啓其後無恙消光致居候其許も筆も定めて丈夫の事と安心致居候可成養生して御安産可被成候

小生昨二十八日朝十日(原)巴理發同夜七時頃倫敦(原)に着致候博覽會も餘り大にて一週間位では何が何やら見當がつかぬ位に候倫敦も今日出で見たれども見當がつかず二十返位道を聞て漸く寓居に還

り候未だ公使館へは參らず留學地も其內定めて落付つもりに候

公使館への手紙は

K. Natsume Esq.

Japanese Legation

(Crosvener[sic] Garden)

London

にて屆き可申候西洋にては金が氣がヒケル程入候留學費でどうしてやるかゞ問題に候町抔へ出れば普通の人間は皆日本の勅任官位な身ナリをして步行致居候洋行生が洒落るのは尤に候是が當地にては普通の事に候

詳しき手紙は何〔れ〕落付てより可差上候　以上

十月二十九日夜一時

金之助

皆樣へよろしく

鏡　ど　の

明日は十時頃迄寢る積に候

〔裏に〕

小生只今の宿所は日本人の下宿する所にて 76 Gower Street, London に候是は旅屋[原]より遙かに安直なれども一日に部屋食料等にて六圓許を要し候到底留學費を丸で費ても足らぬ故早くきり上る積に候

九

十一月二十日 午後零時十五分 85 Priory Read, West Hampstead, London より Bei Frau Lenke, Melanchtonstrasse 28, Berlin 藤代禎輔氏へ（1）〔近衞騎兵兵營繪はがき〕

ナシノ礫の御小言ニハ少々恐縮シタガ君ダツテ一杯機嫌デナケレバ葉書抔ハカクマイ此前ノ葉書ハ立花ガヨコシタノデハナイカ

倫敦[原]ノ天氣ノ惡〔イ〕ニハ閉口シタヨ君等ハ大ゼイ寄ツテ御全盛ダネ僕ハ獨リボツチデ淋イヨ學校ノ講義ナンカ餘リ下サラナイヨ伯林大學ハドウカネ英語モ中々上手ニハナレナイ第一先方ノ言フ事ガハツキリ分ラナイヿガアルカラナ金ガナイカラ倫敦ノ事情モ頓ト知レナイ勉强モスル積ダガソウハ手ガ廻ラナイ獨乙皇帝ハ婆サンノ鐵椎ニ遭ツタソウダ丁度博浪ノ椎ト云フ趣ガアル面白イ今日ビスケツトヲカヂツテ晝飯ノ代リニシタ餘リビールヲ飮ンデハイケナイヨ左樣ナラ

十一月二十一日　　夏目金

萬一手紙ヲ出スナラ公使館ニアテテ吳玉へ一番慥カト思フ
倫敦ノ古本屋ニハ欲イ本ガ澤山アリマス一冊モ御齒ニ合フ者ハアリマセン
此繪葉書ノ處ハ僕ガ到着ノ翌日マゴツイタ處ダヨ

一〇

十二月二十六日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より
牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ（五）

拜啓十一月十七日附の御書面昨十二月二十五日着拜見致候先以て皆々樣時候の御變りもなく御消光のよし奉賀候其許も無事に御暮しのよし珍重に存候當地着以來二回書狀差出し候只今頃は最早御地着の事と存候其後都合有之 6 Flodden Road, Camberwell New Road, S. E. と申す所に轉居致候以前の處は東京の小石川の如き處に存候今度の處は深川と云ふ樣な何れも邊鄙な處に候即ち北西ヨリ南東に轉居致候日本にて三里許りの道のり有之馬車を傭ひて書物を載せて宿替隨分厄介なれど日本の書生の如くランプを手に持つ樣な不體裁は無之候此度の家は先頃迄女學校なりし處傳染病の爲め閉校其後下宿と變化致候主人夫婦と妻君の妹にてやり居候下宿にしては女學校の女先生丈ありて上品に候色々親切にて家族の如く致し居候同宿のもの日本人少々有之候主人は頗る日本人好にて西洋人を下宿させるよりは日本人を客にしたしと申居候是は日本人はおとなしく且金にやかましからぬ故に候もとの高等學校敎授（我々の先生）に「て」國文學の先生池邊義象（もとの小中村義象）氏パリより來り此宿にて邂逅同氏歸朝の節は福本氏方へ參る故中根方へも立寄り小生の近況を話してやると申し居られ候故其內爲參候事と存候間可然御取持可被成候筆への見やげものに「クリスマス」の「カード」依賴致候筈の處混雜の際失念致候

當地にては金のないのと病氣になるのが一番心細く候病氣は歸朝迄は謝絕する積なれど金のなきには閉口致候日本の五十錢は當地にて殆んど十錢か二十錢位の資格に候十圓位の金は二三回まばたきをすると烟になり申候今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成衣食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候殊に留學生は少なく逗留のものは官吏商人にて皆小生抔よりは金廻りのよき連中のみ羨ましき事はなけれど入らぬ地獄抔に金を使ひ或は無益の遊興贅澤品に浮身をやつし居候事惜しき心地致候彼等の金力あれば相應に必要の書籍も買ひ得られ候事と存候其許も二十圓位にては定めし困難と存候へども此方の事も御考御辛防可被成候

中根父上の方へ借金出來候よし是は少々の事と存候もし少にても（一圓でも二圓でも）餘り候

へば其方へ御廻し被下度候中根父上地方局長とかに御轉任のよし政海の事は我等には分り不申候へども御目出［度］き方の轉任と存候
昨日は當地の「クリスマス」にて日本の元日の如く頗る大事の日に候青き杉にて室內を裝飾し家族のものは皆其本家に聚り晚餐を喫する例に御座候昨日は下宿にて「アヒル」の御馳走に相成候
湯淺土屋俣野時々參り候よしよく御あしらひ可被成候
筆も丈夫に相成候よし何より結構の事に候可成我儘にならぬ様あまへぬ様可愛がりて無暗にあまき物抔やらぬ様無暗にすはらして足部の發達を妨げぬ様御注意可被成候是等は一時に害なき様なれども將來恐るべき弊害を生じ一生の痼疾と相成申候小兒の敎育程困難なる物は無之精々御心配願上候
熊本にて一ペン尋ね候西洋人の婆さん「ノット」夫人に不圖長崎より連になり夫より以後色々親切なる注意にあづかり今以て時々書狀の往復を致居候もし櫻井の妻君へでも書狀をだる序[原]あらば「ファーデル」に賴みて右婆さんの娘「ノット」孃（熊本在の宣敎師）へよろしく御傳言可被下候」
時々書面も八方へ差上度候へども一刻もむだな時間は無之可成有益に時を使度と存候故其ひまも無　不惡御推察鈴木夏目其他へもよろしく御傳言賴み上候

倫敦の繁昌は目擊せねば分り兼候位馬車、鐵道、電鐵、地下鐵、地下電鐵等蛛の糸をはりたる如くにてなれぬものは屢ば迷ひ途方もなき處へつれて行れ候事有之險呑に候小生下宿より繁華な處へ行くには馬車地下電氣高架鐵、鐵道馬車、の便有之候へども處々方々へ參り候故時々見當違の處へ參る事有之候
倫敦の中央にては日本人抔を珍らしそうに顧りみるもの一人も無之皆非常に自身の事のみに急がしき有樣に候さすが世界の大都會丈有之候
只天氣のわるきには閉口晴天は着後數へる程しか無之しかも日本晴と云ふ樣な透きとほる樣な空は到底見る事困難に候もし霧起るとあれば日中にても暗夜同然ガスをつけ用を足し候不愉快此上もなく候
當地のもの一般に公德に富み候は感心の至り瀛[原]車抔にても席なくて佇立して居れば下等な人足の樣なものでも席を分つて讓り申候日本では一人で二人前の席を領して大得意なる愚物も有之候又種々の買物でも盜んで出樣とすればいくらでも盜める樣なもの有之古本の如きは窓外に陳列して番人も何もなき處有之候鐵道の荷物抔も「プラットフォーム」に抛り出してあるを各自勝手に持つて參り候日本で小利口な物どもが瀛車を只乘つたとか一錢だして鐵道馬車を二區乘つたとか緣日で植木をごまかしたとか不德な事をして得意がる馬鹿物澤山有之候是等の輩を少々連れて來て見せてやり度候

まだ書けばいくらも有之候へども時なき故擱筆新年の御慶皆様へよろしく
中根様へも書状差上る筈なれど此回は此書狀をかねて失禮致候不惡御宥恕ある樣御取なし可被下候

十二月二十六日　　金之助

鏡どの

一一

十二月二十七日 午前零時十五分 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より Bei Frau Lenke, Melanchtonstrasse 28, Berlin 藤代禎輔氏へ（1）〔繪はがき〕

先日の御手紙拜見「コーチ」と云ふのは書生間の語で private な先生の事を云ふのだよ僕の「コーチ」は「シエクスピヤ」學者で頗る妙な男だ四十五歳位で獨身もので天井裏に住んで書物ばかり讀んで居る今は「シエクスピヤ」字引を編纂中である
二年居つても到底英語は目立つ程上達シナイと思ふから一年分の學費を頂戴して書物を買つて歸りたい書物は欲いのが澤山あるけれど一寸目ぼしいのは三四十圓以上だから手のつけ樣がない可成衣食を節儉して書物を買〔は〕ふと思ふ金廻りのよき連中が贅澤をするのを見ると惜き心持がする
御地の「クリスマス」は如何僕は「アヒル」の御馳走になつた
僕は東京でいふと小石川といふ樣な處から深川といふ邊へ宿替をした倫執[原]の廣いのは驚く瀛[原]車抔を間違へて飛んでもなき處へ持つて行かれる事がある
會話は一口話より出來ない「ロンドン」兒の言語はワカラナイ閉口

十二月二十六日　　金之助

藤代君

明治三十四年

一

一月一日 午後三時半 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より
牛込區肴町五十四番地夏目直矩氏へ（二）〔繪はがき〕

新年の御慶目出度申納候貴家御一同萬福御越年の事と存候小生無恙加馬齡候御安意可被下候平生は多忙の爲め御無沙汰御海恕可被下候

三十四年一月一日

金之助

夏目直矩様
高田庄吉様

二

一月三日 午前十一時三十分 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より
在獨乙○○○○氏へ

下宿の不平は僕も大有だつたが一週二十五志の場所を見出して汚い處に籠城して居る只今は頗る愉快だ下宿は方々尋ねて歩いたが日本人のふるく居る處は皆「スポイル」して仕舞つて高くて惡い樣だ

餘りビールを飮まない樣餘り美人に近付の出來ぬ樣天帝に祈禱して新年の御慶を申上ます

僕は書物をかつて仕舞ふから又邊鄙な處に居るから家がやかましいから金と不便と遠慮がハチ合せをして頗る謹直である

倫孰[原]に遊びにこられるなら僕の處へき給へ安い事は受合いだ

一月三日

金之助

○　○　○

三

一月二十二日 夜 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より
牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ （六） 〔薄葉に筆にて認めあり〕

其後は如何御暮し被成候や朝夕案じ暮し居候先以て皆々樣御丈夫の事と存候其許も御壯健にて今頃は定めし御安產の事と存候此方も無事にて日々勉强に餘念なく候御懸念あるまじく候小兒出產前後は取分け御注意可然と存候當地冬の季候極めてあしく霧ふかきときは濛々として月夜よりもくらく不愉快千萬に候はやく日本に歸りて光風霽月と靑天白日を見たく候當地日本人はあまた有之候へども交際すれば時間も損あり且金力にも關する故可成獨居讀書にふけり居候幸ひ着以後一回も風をひかず何より難有候近頃少々腹工合あしく候へども是とても別段の事には無之どうか留學中には病氣にかゝるまじくと祈願致居候

倫敦の市內を散步すればほしき物澤山有之國へ歸るとき見やげものにしたきものも非常に多く候へども如何にせん微力にて一向買ふ事出來ず故に散步のときは場末の田舍のみあるき居候

先年熊本にて筆と御寫し被成候寫眞一牧[原]序の節御送り可被下候厚き板紙の間に挾み二枚絲にてくゝり郵便に御投じ可被下候當地は十圓位出さねば寫眞もとる事出來ず候故小生は當分送りがたく候

他國にて獨り居る事は日本にても不自由に候況んや風俗習慣の異なる英國にては隨分厄介に候朝起きて冷水にて身を拭ひ髯をそり髮をけづるのみにても中々時間のとれるものに候況んや白シャツを着換へボタンをはづし杯する實にいやになり申候西洋人との交際別段機會も無之且時間と金なき故可成致さぬ樣に致居候

當地の品物は高き代りに皆丈夫向に候中にも男子の洋服は「パリス」よりも倫敦がよろしき由成程結構に候小生も當地にて「フロック」と燕尾服を作り候是は日蔭町の如き所故無論極粗末なものに候其上「フロック」は出來損ひ申候是は漸く旅費の餘で調へ申候然るに「フロック」の袖口廣く外套の袖狹く大に困難致居候此地に居る日本人の内には人より三四月前に來りながら倫敦通をきめて新來の日本人の服裝杯を冷かし申候其癖當人の洋服は頗る妙なのを着て得意がつて居候是は洋服屋にだまされて無暗に高き金をとられ自分は人よりも高き金を拂つた故品物も仕立も人より遙かに上等と心得居る如き愚物に候

此地にて物價の高きは一寸靴一足を買ひ候ても十圓位はかゝり候にて御推了被下度候毛織物は割合安く候襟等は非常に白く堅く到底日本のとは比較になり兼候外に出た時一寸晝飯を一皿位食へばすぐ六七十錢はかゝり候日本の一圓と當地の十圓位な相場かと存候隨つて知らず〳〵の中に贅澤になり申候洋行生が日本に歸りて贅澤と思はるゝは尤もと存候是はあながち贅澤には無之當地にて普通以下の事を日本ですれば頗る贅澤と見做さるゝ迄に候

氣候は隨分寒き事有之候へども概して東京よりは凌ぎよく此二三日は春の如き心地致候位それも例年此通なるや分り兼候東京は嘸寒き事と存候正月の樣な心持は少しもなく候

芝居には三四度參り候いづれも場内を赤きビロードにて敷きつめ見事なる事たまげる許りに候道具衣裳の美なる事亦人目を驚かし候中にも寄席芝居の樣なものは五六十人の女翩々たる舞衣をつけて入り亂れて躍り候樣皆に見せ度程うつくしく候其中此女がフワ〳〵と宙に飛び上り（ハリガネの仕掛にて）て其女の頭胸手杯に電氣燈がツキ夫に輕羅と寶石が映ずると云ふ譯だから想像しても美いと思ふだらう然し眞面目な芝居に善き席にて見物せんとするには燕尾服をつけ白襟ならざるべからず喫烟は無論出來ず頗る窮窟に候小生はセビロ赤靴にて飛び込み大に閉口したる事有之候

當地の商人紳士少し身分あるものは平生必ず「フロック」に絹帽をいたゞき候中にはクヅ屋から貰た樣な「シルク」帽を蒙りヘンテコな「フロック」を着て居るのも有之御（原）羽うち枯した浪人と申す位な處なるべし男子服裝は頗るヂミにてせびろも黑多くヅボン縞あれども黑ズミて遠方から見れば無地と思ふ樣なものゝみに候中以下は夏冬同じものをつけ居候由少し上等になれば晚には必ず燕尾服に着換て食事をなす風に候燕尾服は必ず晚の禮服ときまり居候葬儀結婚等の大禮にても日中執行するものは必ず「フロック」を用い申候「フロック」を着ても燕尾服をつけてもつけばいの致さぬは日本人に候日本に居る内はかく迄黃色とは思はざりしが當地にきて見ると自ら

己れの黄色なるに愛想をつかし申候其上脊が低く見られた物には無之非常に肩身が狹く候向ふから妙な奴が來たと思ふと自分の影が大きな鏡に寫つて居つたり抔する事每々有之候顏の造作は致し方なしとして脊丈は大きくなり度小兒は可成椅子に腰をかけさせて坐らせぬがよからんと存候尤長く當地に居る人は大抵奇麗にてどこか垢ぬけ致居候へども脊丈は十年居つても高くなる事は御座なく閉口の至に候往來にて自分より脊の低き西洋人に逢つた時は餘程愉快に候然し大抵の女は小生より高く候恐縮の外無之候

住みなれぬ處は何となくいやなものに候其上金がないときた日にはニッチもサッチも方が就（原）かぬ次第に候下宿に籠城して勉强するより致方なく外へ出ると遂（原）金を使ふ恐有るものに候筆は定めし成人致し候事と存候時々は模樣御知らせ可被下候少し歩行く樣になると危儉（原）なものに候けがなき樣御注意可被下候

鈴木禎さんへは一向手紙も上げず失禮ばかりして居る序の節よろしく云ふて下さい

手紙も再々上げたいが時を使ふのが惜いからあまり書かない其積りで居い（原）下さい御手紙はいつでも公使館宛で御出可被成下宿は只今の處より移らぬ積なれど換えぬとも限らぬ事に候高濱よりほとゝぎすを贈つて吳申候着後既に三冊もらひ候

產後の經過よろしく丈夫になり候へば入齒をなさい金がなければ御父ッさんから借りてもなさい歸つてから返して上ます髮抔は結はぬ方が毛の爲め腦の爲よろしいオードキニンといふ水があ

る是はふけのたまらない藥だやつて御覽はげがとまるかも知れない

餘り長くかくと時がつぶれるから此位にして置く

三十四年一月二十二日夜　　金之助

鏡　ど　の

此方へ郵便を出すには郵便日といふのが極つて居る今年中の表が出來て居て橫濱を何月何日に何船が出て「アメリカ」若くは印度を通つていつ倫敦につくといふ日取が分る此表は多分郵船會社か何かでくれるであらふから御貰ひなさい「アメリカ」便の方が二週間許り早く吳（原）狀（原）裝の左の上の端に Via America とかけばアメリカ便でくる

四

一月二十四日　夜　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より

牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ（七）〔薄葉に筆にて認めあり〕

昨日久々にて一書相認め郵筒に附し候處今日御地十二月二十一日付の書翰到着皆々無事のよし

承知大慶此事に御座候

小兒出産後命名の件承知致候是は中根爺樣の御つけ被下る事と合認（原）して何とも申し遣はさず打絕申候名前も考へると無（原）づかしきものに候へどもどうせいゝ加減の記號故簡略にて分りやすく間違のなき樣な名をつければよろしく候今度の小兒男兒なれば直一とか何とか御つけ可被成候是は家の人が皆直の字がついて居る故なり又代輔でもよろしく是は死んだ兒の幼名なり或は親が留守だから家の留守居をする卽ち門を衞ると云ふので衞門抔は少々洒落て居るがどうだね門を衞るでは犬の樣で厭なら御止し己と御前の中に出來た子だからどうせ無口な奴に違ひないから夏目默（モク）抔は乙だらう夫とも子供の名前丈でも金持然としたければ夏目富（トム）がよからう但し親が金之助でも此通り貧乏だからあたらない事は受合だ女の子なら春生れだから御春さんでいゝね待（マツ）レ父（チ、）ヲの上ノ一字ヅヽを取つてマチ卽ち町は如何ですかな己の御袋の名は千枝（チエ）といつたこいつは少々古風で御殿女中然として居るな姉が筆だから妹は墨（スミ）としたら理窟ポイかな二字名がよければ雪江、浪江、花野なんて云ふのがあるよ千鳥鷗とくると鳥に緣が近くなるし八つ橋、夕霧抔となると女郞の名の樣だからよしたがよからうまあ〳〵何でも異議は申し立んから中根のおやぢと御袋に相談してきめるさ

入齒の事承知俣野湯淺土屋へは無沙汰をして居るよろしく言つて御呉れたまに來たら燒芋でも食はしてやるがいゝ菅の奥さんが來たら是亦よろしくだ菅へも狩野へも一返も手紙をやらないよ此手紙と前便とは一所に屆くだらう此土曜が郵便日だから

二十四日夜

金

鏡　ど　の

御梅さんは脊が高くなつたかね御豐さん、たけさん、倫さん皆さんへよろしく倫さんは勉强するかい近頃はどんな樣子かね

五

二月五日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より

在獨乙〇〇〇〇氏へ

所謂難關說は承はつた時は左程でもなかつたが昨今は大に名說だと思つて感服仕るね第一無精極まる僕が妻の處へ丈は一月に一返位便りをするから奇特だらうあんな御多角顏でも歸たら少々大事にしてやらうと思ふよ僕は書物を買ふより外には此地に於て樂なしだ僕の下宿抔と來たら風が通る暖爐が少し破損して居る憐れ憫然なもんだねかういふ所に辛防しないと本抔は一冊も買へ

ないからなー先達文部省へ申報書を出した時最後の要件と云ふ箇條の下に學資輕少にして修學に便ならずと書てやつた僕はまだ一回も地獄抔は買はない考ると勿體なくて買た義理ではない○○が聞たらケチな奴だと笑ふだらう西洋人と交際もしない廣く交るには紹介も必要だし衣服其他もチャンとしなければならず馬車も奢らねばならず第一時間を浪費して而して「シンミリ」した話は出來ないからねあまり難有い事はないよ大學も此正月から御免蒙つた往復の時間と待合せの時間と教師のいふ事と三つを合して考へて見ると行〔く〕のは愚だよ夫に月謝抔を拂ふなら猶々愚だ夫で書物を買ふ方が好い然も其 Prof. がいけすかない奴と來たら猶々愚だよ君はよく六時間なんて出席するね感心の至だ僕のコーチも頗る愚だが少しは取る處ありで是丈はよさずに通學して居る system も何もなくて口から出まかせを夫から夫へとシャベる奴だよ君は病氣だつたつてね大事にし給へ美人を封じられて轉た郷愁を惹くと云ふ譯なら封じられない前は思ひやられるね、せつぱつまらなければ不品行抔はよすがいゝ其方が上品でもあり經濟でもあり時間も徳であるからね僕は幸ひ無事だ安心して吳給へ友達がなくて淋い倫敦へ遊びに來ないか立花も病氣だつてね[原]加愛想によろしくいつて吳給へ神田男爵はどうだね君も少しはシャレル様になつたらう以下次號

○　○　○

二月五日

金之助

六

二月九日 朝 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より

東京狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎、四氏へ

金之助

三十四年二月九日朝

狩野君

大塚君

菅君

山川君

其後は何方へも御無沙汰をして濟まん〳〵と思つて居ると一昨七日山川君から年始狀が來た續いて菅君からも繪端書が來たかうなるといかな無精な拙者でも義理にも默つて居られないといふ譯で勇猛心を鼓舞して今土曜の朝を拋つて久し振りに近況を御報知する事にした尤も諸君へ別々に差上るのが禮ではあるが長い手紙を一々かくのは頗る困難であるから失禮ではあるが一纏めの連名で御免蒙る事とした夫から例の候の奉るのは甚だ厄介だから少し氣取つて言文一致の會話體

に致した右不惡御了承を願ふ」.

着後の景況を詳しく述べるには紙數に限りありといふよりも時間に限りありで到底出來にくいから一寸かいつまんで申上様

九月八日に日本を出てから十月下旬に「パリ」にて博覽會を一週間許り見たが一切何にも分らないと思ひ給へ夫から皆に別れて心細くも英國へ着したが朋友も居らず方角も分らず北海道の土人が始めて東京へ修業に出た位の處さ大塚君から敎へられた Gower St. の下宿へ行つて部屋の明いて居る處があるなら留めて頂けますまいか何ていふ頗る馬鹿叮嚀な調子で賴み込んで漸く雨露丈は凌いだ

偖是から留學地選定の件を方付ねばならぬ「ケンブリッヂ」か「オクスフォード」か乃至「エヂ[原]バラ」か「ロンドン」かと色々思案をしたが幸ひ或る西洋人の紹介を持つて居たから一先「ケンブリッヂ」に行つて様子を見て來ようと思ふて出掛て見た是が英國内の旅行の最初である「ケンブリッヂ」へつくと驚いたのは書生が運動シャット運動靴で町の内を「ゾロ〳〵」歩いて居る是は船を漕いだり丸を抛げたり又は自轉車へ乘る先生方であつて而して大學生の大部分は此先生方である夫から段々大學の様子を聽て見ると先づ普通四百磅乃至五百磅を費やす有様である此位使はないと交際抔は出來ないそうだ尤もやり方でもつと安くも出來るが世間がそういう風だから衣服其他之に相應して高い月謝も高い留學生の費用では少々無理である無理にやるとした處が交際もせず書物も買へず下宿にとぢ籠つて居るならば何も「ケムブリッヂ」に限つた事はない少しでも樂な處に行くが善いと判斷した是に於て「ケンブリッヂ」も「オクスフォード」も御已めにして此度は「エヂバラ」か「ロンドン」かと考へ出した「エヂンバラ」は景色が善い詩趣に富んで居る安くも居られるだらう倫敦[原]は烟と霧と馬糞で塡つて居る物價も高い、で餘程「エヂンバラ」に行かうとしたが茲に一の不都合がある「エヂンバラ」邊の英語は發音が大變ちがう先づ日本の仙臺辨[原]の様なものである切角英語を學びに來て仙臺の「百ズー三」抔を覺えたつて仕様がない夫から倫敦の方はいやな處もあるが社會が大きい女皇が死ねば葬式が倫敦を通る王が即位すれば「プロクラメーション」が倫敦である芝居に行きたければ West End に竝んで居る夫から僕に尤も都合の善いのは古本抔をさがすには（新い本で「も」出版屋は大概倫敦である）此處が一番便利である　以上の譯で先づ倫敦に止まる事に致した

倫敦に留まるとすれば第一學校第二宿をきめねばならぬ學校の方は University College ノ Prof. Ker に手紙をやつて講義傍聽の許諾を得たから先よいとして宿の方は困つた第一安直でなければならぬ第二可成閑靜な處が欲い夫から公使館へ行つて日本人の名簿を引くり返して留學生の居つたらしい處を尋ねる事にした處が倫敦は廣い瀛[原]車馬車交通の機關は備はつて居るが田舍者のぽつと出には悲いかな之を利用する事が出來ぬ仕方ないから地圖にたよつて膝栗毛で出掛ると一二軒尋ねる内に日が暮れて仕舞ふ然も其尋ねた家が代が替つて居たり部屋が塞がつて居つたり或は滅

法高かつたりして皆だめだ夫から此度は新聞の廣告を見て探し出した廣告の貸間は素敵にあるもんだよ之を見通すさへ三時間位はかゝる況んや之を尋ねるに於てをやだ此困難を經過して漸く二週間の後東京の小石川といふ様な處へ一先づ落付たすると此家がいやな家でね——且つ頗る契約違背の所爲があつたから今度は深川のはづれと云ふ様な所へ引越した道程は四五里もあるだらう隨分書物抔は不便なものだよ東京の書生の様に「ランプ」を持つてこそ行かないが實にいやなもんだよ此家が 6 Flodden Camberwell New Road S. E. で此手紙を書いて居る所だよ

　宿は夫で一段落が付た夫から學校の方を話さう University College へ行つて英文學の講義を聞たが第一時の配合が惡い無暗に待たせられる恐がある講義其物は多少面白い節もあるが日本の大學の講義とさして變つた事もない滊車へ乘つて時間を損して聽に行くよりも其費用で本を買つて讀む方が早道だといふ氣になる尤も普通の學生になつて交際もしたり圖書館へも這入たり討論會へも傍聽に出たり教師の家へも遊びに行たりしたら少しは利益があらう然し高い月謝を拂はねばならぬ入らぬ會費を徵集されねばならぬ其のみならずそんな事をして居れば二年間は烟の様に立つて仕舞ふ時間の浪費が恐いからして大學の方は傍聽生として二月許り出席して其後やめて仕舞た同時に Prof. Ker の周旋で大學へ通學すると同時に Craig と云ふ人の家へ教はりに行く此人は英詩及「シエクスピヤー」の方では專門家で自分で edit[原] とした沙翁を「オクスフオード」から出版して居る「ダウデン」の朋友で今同教授が出版しつゝある沙翁集中の「キングリヤ」の

editor である「ベーカー」町の角の二階裏に下女と二人で住んで居る頗る妙な爺だよ餘「り」西洋人と縁が絶ても困るから此先生の所へは逗留中は行く積りだ

　以上は僕の大體の經歷だ是からくだらぬ事を一二御話し様

　僕は英語研究の爲に留學を命ぜられた様なものゝ二年間居つたつて到底話す事抔は滿足には出來ないよ第一先方の言ふ事が確と分らないからな情ない有様さ殊に當地の中流以下の言語はＨノ音を皆拔かして鼻にかゝる様な實に曖昧ないやな語だ此は御承知の cockney で教育ある人は使はない事になつて居るが實に聽きにくい仕方ないからいゝ加減な挨拶をして御茶を濁して居るがね其實少々心細い然し上等な教育のある人になると概して分り易い芝居の役者の言語抔も頗る明晰先づ一通りは分るので少しは安心だ然し教育ある人でも無遠慮にベラ〳〵曉[原]舌り出すと大に狼狽するよ日本の西洋人のいふ言が一通り位分つても此地では覺束ないものだよ元來日本人は六づかしい書物を讀んだり六づかしい語を知つ「て」居るが口と耳は遙かに發達して居らん此も一種の教育法かも知れぬが內地雜居の今日口と耳がはたらかないと實用に適しないのみならず大に毛唐人に馬鹿にされるよ堂々たる日本人が隨分御出になるが會話がまづいから西洋人の方では學問も會話位しか發達して居ないとしか考へないつまらぬ様だが日本でも手紙の字がまづいと其人を惡く想像するといふ様な譯だから仕方がない此を改良するのは大問題だ到底僕抔には考へられない恐く今の日本の有様では何人も名案はあるまい然し少しでも善き方に進ませるが教育者の任であ

る山川君抔は隨分御研究被下たいと思ふ然し同じ敎育のある人でも非常に分りよいのと分りにくいのとあつてね日本と同じ事だよ大幸勇吉の日本語抔は僕にも分らないからな

斯いふ譯で語學其物は到底僕には卒業が出來ないから書物讀の方に時間を使用する事にして仕舞た從つて交際抔は時間を損するから可成やらない加之西洋人との交際となると金がいるよ御馳走ばかりになつて居るとしても金が居る〔原〕よまづい洋服抔は着て居られないしタマには馬車を驅らなければならないし而も餘程親密にならなければ一通りの談話しか出來ない興味のあるシンミリした話なんかはやれないからね夫も二年で語學が餘程上達する見込があれば我慢してやるがそれは以上の理由でだめだから時間を損し金を損して是といふ御見やげがない位なら始めからやらない方がいゝからね僕は下宿籠城主義とした

下宿といへば僕の下宿は隨分まづい下宿だよ三階でね窓に隙があつて戶から風が這入つて顏を洗フ臺がペンキ塗の如何はしいので夫に御玩弄箱の樣な本箱と横一尺竪二尺位な半まな机がある夜抔は君ストーブを燒〔原〕くとドラフトガ起つて戶や障子のスキからピューピュー風が這入る室を煖めて居るのだか冷して居るのだか分らないね夫から風の吹く日には烟突から「ストーブ」の烟を逆戾しに吹き下して室内は引き窓なしの臺所然として居る何に元の書生時代を考へれば何の事はないと瘠我慢はして居るが色々な官員や會社の役人や金持が來てねくだらない金を使ふのを見るといやになるよ日本へ歸れば彼等のある者とは同等の生活が出來る外國へ同じ官命で來て留學生と

彼等の間にはかゝる差違が何故あるかと思ふと歸り度なるね然しこんな愚癡は野暮の至りだから默つて居るが何しろ彼等の或物が日本の利益にも何にもならない處に入らぬ金を茶々風茶に使ふのは惜いよ

下宿の有樣は以上の如しだから是から下宿の家族に付て一言せざるべからざる譯となる抑も此下宿たるや先頃迄は女學校たりしものが突然下宿に變化したのである是は女學生中に流行病が起る生徒がなくなる借金が出來る不得已閉校して下宿開業借金返濟策と出掛た故に此家の女主人公は固の女學校の校主にして其妹たるや學校の音樂敎師たりと云ふ譯さそして此姉が閉校後結婚して亭主も同宿して居る其外に元の女學生が一人居るこう云ふと大變上品の樣に聞える僕も其積りで移つたのであるが移つて段々話しをして見ると誰も話せる奴はない書物抔は一向知らない姉君の方は元はどこかの governess であつたとかで頻りに昔しの夜會や舞踏抔の話をする叉繪がかけると云ふのが御自慢である大變な vanity の强い女で御相手をするのが厭だからフンフンと云つて向通りを眺めて居ると張合がないと見えて自慢話しをやめる事がある近頃は僕の人となりを知り僕の如何なる人間たるやを少し會得したと見えて餘り法螺を吹て自慢しなくなつた頗る謹愼して殊勝である夏目の德御天馬〔轉婆〕に及ぶと云ふ位のものだ

此女將軍の英語たるや學校の主幹たりし丈にわるくはなければども決して上品にあらず且六づかしき字抔は知らず會に俗に用いない字を使ふと「アクセント」や發音を間違へる此方の言語がム

ヅカシクて分らなくても日本人に聞ては英國婦人の品位が落ちると云ふ樣な顏で知たふりで通す頗る憐れな奴だ（山川君に取分けて申すが）一般の英國人よりも我々が學者であつて多くの書物を讀んで居つて且つ英國の事情（ある事情昔し存在して今なき樣な事情）には明かであると申して差達[原]なし前には語學の困難を申して我々は二足[原]三文の價値なき樣に申上たが斯樣な點になる［と］彼等よりも威張れるよ安心し給へ或る西洋人は pillory と云ふ事を知らなかつた或人は such a one と云ふとか such an one であるとかで議論して居た或る婆さんは benefit と云ふ字は a noun of multitude だといつて僕に敎へた耳で聽た事のない書物上ニ出テくる字の「アクセント」などはよく間違へて居る然も以上の點は普通敎育を受たもの丶內にあつた事其內のあるものは大學の卒業生中にあつた事と思ひ給へ

其から妹の方は極めて內場[原]だ賢[原]夫人である敎育はさしてないがあるふりをせぬ丈が感心である夫から亭主もい丶奴だが頗る無學で書物抔は讀んだ事もあるまい此間一所に芝居「パントマイム」を見物に行た Robinson Crusoe をやつて居つた所が實際是は小說か事實物譚かといつて僕に尋ねた

芝居といへば此ちらの芝居は奇麗だよ其代り中央の善い芝居へ行くと善い席では燕尾服をつけなければならぬ僕は赤靴ジャケツで飛び込んで極りが惡かつた事がある

交通機關は便利だね馬車電鐵地下鐵道高架鐵道色々のがあるよ其代りやかましくつていやだ馬

車へ乘つて濟して居ると元の方角へ連れて行かれたり瀛車を乘違へて飛でもない處へ持て行かれたりする事が澤山ある

紳士は大概「フロック」に「シルクハット」ダ中には如何しき「フロック」に屑屋の樣な「シルクハット」を被つて居るのがある浪人のベンベラの羽二重と云ふ樣なものだらう

先達ての女皇の葬式は見た「ハイドパーク」と云ふ處で見たが人浪を打つて到底行列に接する事が出來ない其公園の樹木に猿の樣に上つてた奴が枝が折れて落る然も鐵柵で尻を突く警護の騎兵の馬で蹴られる大變な雜沓だ僕は仕方がないから下宿屋の御爺の肩車で見た西洋人の肩車は是が始ての終りだらうと思ふ行列は只金モールから手足を出した連中が續[原]がつて通つた許りさ

僕は少々面白い本を買つた狩野君に見せたいのがある

僕は順に行けば來年の十月末若くは十一月始ニ歸朝するのだが少シ佛蘭西に行つて居たいどうも佛蘭西語が出來んと不都合だ切角洋行の序にやつて行きたいが四ケ月か五ケ月でい丶が留學延期をして佛蘭西に行く事は出來まいか狩野君から上田君に話して貰ひたいそうして一寸返事をよこして貰ひたい。そうするとサ來年四月位ニ歸ル譯ニナル

夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君に御願ひ申す僕はもう熊本へ歸るのは御免蒙りたい歸つたら第一で使つてくれないかね未來の事は分らないが物が順にはこぶと見て僕も死なず狩野君も校長をして居るとした處で如何ですかな御安くまけて置きますよ

大塚君の指輪は到着したかね安達から手紙が行つたらう
山川君世帶を持つたか僕は歸つたらだれかと日本流の旅行がして見たい小天行抔を思ひ出すよ
僕は中々手紙をやらないから諸君に賴むのは妙だが時々何か書てよこして呉れ給へ御願だ宛名は公使館がいゝ下宿は移る事があるから

七

二月二十日 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より
牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ（八）

國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた御前の手紙は二本來た許りだ其後の消息は分らない多分無事だらうと思つて居る御前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い山川から端書が來た先達て是は年始狀だ菅からも年始の端書をくれた其外に熊本の野々口と東京の太田と云ふ書生から年始狀が來た手紙は是丈だ

御前は子供を產んだらう子供も御前も丈夫かな少々そこが心配だから手紙のくるのを待つて居るが何とも云つてこない中根の御父つさんも御母さんも忙がしいんだらう

金巡[原]りさへよければ少しは我慢も出來るが外國に居て然も囊中自か「ら」錢なしと來てはさすがの某も中々閉口だ早く滿期放免と云ふ譯になりたい然し書物丈は切角來たものだから少しは買つて歸り度と思ふそうなると猶[原]必逼する然し命に別條はない安心するが善い

段々日が立つと國の事を色々思ふおれの樣な不人情なものでも頻りに御前が戀しい是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ夫から筆の事だの中根の御父つさんや御母さんの事だの御梅さんや倫さんの事だの狩野だの正岡だの山川だの菅だの親類や友達の事なんかを無暗に考へる其癖あまり手紙はかゝない先達大坂[原]の鈴木と時さんへ一本出した熊本の櫻井へも出した狩野大塚山川菅へ連名で出した夫から中根の御母さんへ一本出した是は此前の郵便で屆くか事によると此手紙と一所に屆くだらう

おれの下宿は氣に喰はない所もあるが先々辛防して居るよ妻君の妹が洗濯や室の掃除抔の世話をする中々行屆いたものだシャツや股引の破けたの抔は何にも云はんでもちやんと直つて[原]呉る御前も少々氣をつけるが善い

湯淺だの俣野、土屋、抔にも逢ひ度、高知縣の書生でよく來た男一寸名前を忘れて仕舞たあの男抔の事も時々考へる

おれの下宿には○○と云ふサミュエル商會へ出る人が居る此人はノンキな男で地獄の話より外は何にも知らない人だ此人と時々芝居を見に行く是は一は修業の爲だから敢て贅澤ではない日本